と罵つた。

『彼の女は、歳計不足夫人である。』

と嘲つたりして、政府の財政が、窮乏して重い税を人々に課する源となつてゐるのは、第一に王妃であるとさへ、思ひつめて居た者が多かつた。それ等の事が、王妃の自尊心を、非常に傷けた。王妃は、斯うしたとから、バリーの下層民に對しても、餘り同情しなくなつた。却て彼等の暴發的な性質を憎んだ。

王妃は、平民議員が、勝利を得たのを王政の危機が近付いた事だと解釋して王に、此の事を警告した。

『今は、武斷主義を以て、彼等を抑へ付けるより外に、仕様が御座いませぬ。』

王は、そこ迄思ひつめて居なかつたけれども、王妃一派から、切言されて、止むなく、武斷主義の假面をつけた。其ためプローリー將軍は、四萬ばかりの兵を以て、要所々々を固め、其の威勢の下に、平民議員を抑へ付けやうとした。斯うして王妃一派は王を誤り、合せてバリーの勞働階級や、平民議員らの反感をも挑撥した。果して、その反動は、急潮のやうに起つて、バリーの勞働階級が、湧きかへるやうな騷ぎをひき起して、壓制の象徴と目ざゝれてゐたバスチーユ獄の破壞となつて現はれた。

六　王妃の心痛

バスチーユ破獄事件は、流石に敏感な王妃を驚かした。殊に今迄王室の身方とのみ思つてゐた近衛兵が、暴徒に加勢したと云ふことは、一層の驚きであつた。王妃も流石に武斷政策を執ることを、一時思ひ留ることにした。それと同時に、王の人望も、略ぼ恢復せられた。

斯うなると、今迄議員が、王室に對して有してゐた反感や、憎惡はアルトア伯、コンデ公などの上に集るやうになつた。アルトア伯らは、それを恐れて急に勢力を失つ

て、バリーを去つてツーロン地方に、身を潜めるやうになつた。それでも王妃は尙ほ目ざめなかつゝ、王妃は外界の烈しい威迫に逢つて居乍らも、尙ほ專制保守主義の夢を續けた。王妃が、宮廷にゐて、王の背後に潜んでゐる間は、すべての改革が、困難であつた。王妃が王のために、心痛すればするほど、畫策すればするほど、その結果は、却てよくなかつた。

もう、王妃が如何に、もがいても、あせつても、フランス革命の潮流は、恐しい勢を以て、全國に漲つて了つた。王室の權力は日毎に、微弱になつた。政府の勢力も亦これに伴れて、衰へた。フランスの政權は、政府から、次第に國民議會の方へ移つて來た。王妃は、それ等の有樣を見て、又しても心痛した。王室の運命は一體如何なるのであらうか、今は餘程の危機である。如何しても、王權を元のやうに、恢復せねばならぬと考へつめて、ミラボーや、ローランなどの力を假りて見た。けれども、それさへ宜い結果を收めることが、むづかしかつた。

七　惡運の神

其の後、秘密の中に突然實行されたメッツへの逃亡も、王の不注意と不決斷とから、全く失敗に終つた。以來、フランスの一勢力となつてゐたバリーの勞働階級は、酷く王室に反感を持つやうになつた。メッツへ赴いて、外國の兵力を借り入れて、逆にバリーを壓迫しやうとする計畫が、彼等を憤らせたのみならず、地方の革命黨の人々をも怒らせて、王室の權威は、殆ど地を拂うて去つた。王妃は失望と憤恨の念に打たれ乍ら、王と共に、バリーへ歸つたが、その時、バリー市民の冷かな眼を見て、王妃は更らに、その失望と憤恨との度合を增した。

其の後の形勢は、事毎に、王妃の望みとは、全く反對の方へのみ進んだ。國民議會は、王を廢めて王家の人々をタンプルの古塔へ押こめた。王妃も亦、此の悲しい運命

を王と共にした。當時、王妃の心は非常に複雜に働いてゐたであらう。王妃は、勝氣な方であつたから、如何な時にも、大抵取亂した態度を、示さなつた。眼の前に現はれた悲しい運命の前にも潔く服從した。心をしづめて悲みと憤りとを、ぢつと、抑へて民衆と臣下とに對した。それでも、彼の女の王權主義の考へから見ると、王一族に對する國民議會の處置は全く腑に落ちなかつた。それは反逆に比しいもので、他日王室の勢力が恢復された曉には、當然死刑に處せらるべき行爲だと考へた。

王妃は、タンプルの古塔に苦み乍らも、尙ほオーストラリヤを始め、歐洲諸强國の對佛宣戰が、外面から、革命黨を押へ付けて、王が再び世の中に出られる時が來るにちがいないと云ふ空想を抱いてゐた。殊に外國へ逃げたフランス貴族の暗中飛躍は、必度王家に幸ひするであらうと、幽かに、心頼みにしてゐた。けれども、それ等は、皮相の見方に過ぎなかつた。今は全フランスの大半は、革命熱に罹つて、そのため、全歐洲を敵としても、世界を敵としても、決して屈しないと云ふ決心が、人々の顏の上に、はつきり現はれてゐた。王妃の空想は、實現されさうであつて、矢張空想として、終るべきものであつた。それから以後、王妃の前には、惡運の神が、苦い顏をして、突立つてばかりゐた。

八　王に哀別した涙の痕

不幸は、續々、王妃を見舞つた。

第一は、王の死刑であつた。王がこの宣告を受ける前、王妃は王の許から無理に別れさせられて、別のところにゐた。王妃は、一切の精力を擧げて、その子女の敎育に用ゐてゐた。その心はいつも、はり詰めてゐたけれども、流石にエルサィユにゐた時ツキルリーにゐた時、王と豪奢な生活を續けて、家庭の樂みに浸つてゐた時代のことを折々思ひ浮べると、何となくその心が重くなるのを感じた。殊に王室の前途、自分

たちの將來を考へると、一寸先きが眞暗なやうに見えた。こんな屈辱に甘んじてゐるよりは、一思ひに死んだ方が宜いと思ひつめる日もあつた。

王妃の今の生活と昔の生活とを比較ると、何と云ふ相違であらう。昔は、光榮と歡樂の下に、いつも、春の樣な、快い氣分に生きてゐたのが、今は不自由と屈辱の下に、冬の雨が降り續いてゐるやうな、ジメ〳〵した氣分の中に、始終淋しい思ひをして、生きてゐなければならぬと云ふことは、餘りに激しい相違であつた。

王妃は、思つた。『たとひ、民衆が、革命のため、狂人のやうになつてゐるにしても長い間此の國に君臨してゐたルイ王家に對して、かく迄烈しい冷遇を與へ、虐待を與へるとは、何事だらう。如何しても、眞實とは思へない。惡い夢である、恐しい夢である。これが眞實とは思へやうか。』と。王妃は、今の生活を破壞して、元のやうにならうと焦慮つたが、外間との交通を、一切絶たれてゐて、護衛兵は寸分も、その監視の眼を休めない。鬼のやうな彼等の殘忍！王妃は、それから、それへと考へ續けると

もう自分で、自分の身體を支える力さへ、無くなつた。此の世が、今にも引くりかへり相に思はれた。

斯うした場合に、王妃が王の許に、突然呼び寄せられて、死刑宣告があつたと聞かされた時は、一時氣絶せんばかりに、驚き、悲んだ。王妃も、王が考へてゐたやうにせめて追放か、禁錮か、その二つ以外には出ないと思つてゐた、それさへも餘りに暴虐だと思つてゐた。ところが、其の暴虐を通り越して、死刑の宣告を與へるとは、何と云ふ大逆無道な人達だらう。彼等は、人間でない。神に背いた惡魔のやうな群である。如何なに、罵つても、鞭つても、踏み付けても、飽き足らないほどの恩知らずな人々であると、熱い涙が、王妃の痩せて青ざめた頰を傳うて、流れ落ちた。

王妃が王の優しい口から、告別の言葉を聞いた時、ひしと王妹らと共に王の手にすがり付いて、泣き倒れた折の感想は、名狀し難い悲みの絶頂にあつた。

その上、王妃は、王が愈よ斷頭臺に上る日には、到頭王と逢ふことを許されなかつ

た。せめて、臨終の前に、唯一目てもと思つた王妃のはかない望みは、全く外れた。けれども、これは却て、王妃に取つて、幸ひてあつたかも知れない。王がその臨終に國民に告げやうとした望みの言葉が未だ二言三言しか出ない中に、恐ろしい巨斧が王の身首を二つにした悲劇を眼前に見たら、必度、王妃の心臓を破裂させないては、濟まなかつたにちがいないからである。

九　變りはてた王妃の樣子

王妃が、王の悲劇を他所ながら、悲しく見送つてから、半年ばかり經つて、淋しい物思はせる秋が又ためぐつて來た。當時過激派の人々は、王妃をも邪魔にして、突然王妃に死の宣告を與へた。王妃は、かねて其の事を覺悟してゐた。けれども、其の事について、不條理な點は、あく迄不條理として、自分の考へを、はつきり述べて置かねばならぬと思つた。

王妃は、その頃、コンシエルジリーの獄中にわびしく起臥してゐた。此處は、パリーの中で、一番淋しく、一番陰氣なところで、その室は暗く、冷めたかつた。此で、王妃は、その子女と共に、わびしい二ヶ月ばかりの日を送つてゐたが、その間の辛苦は、王妃の心を、一層痛ましいものにした。

王妃が、革命裁判所へ呼び出されたのは、十月十四日(一七九三年)であつた。此の事は、王妃が一生の中で最も堪え難かつた最大の屈辱であつた。王妃は何處迄も自分の正しいことを信じて、惡びれないで、法廷の前に起つた。その風采は、暫く見ぬ間に非常に變つてゐた。タンプルの古塔に、押こめられて以來、約二年ばかりの苦い〳〵月日は、王妃に心痛の重荷を與へた爲め、美しい顏色は衰へ、金髮は大方眞白くなつて、頰は落ち、目は恐しく窪み、唇の色さへ大方なかつた。これが曾て歐洲の外交界を賑はした美しい可憐な花であつたとは、如何しても思はれなかつた。唯その眉の

邊に動いてゐる負けぬ氣象、凛とした威嚴だけが、僅かに美しかつた昔の王妃の面影を偲ばせた。

判事は、王妃に向つて、可なりに殘酷な審問を始めた。けれども、王妃は寧ろ、判事を憫むやうな眼付をして、最も簡明な言葉で、それに答へた。

『貴女は、何でも、知らぬ〳〵の一轉張で押し通さうとせらるゝか。』

と判事が嚴力に詰問した時、

『知らぬと云ひ張るのではありません。妾の云ふのは、總べて本當のことですから、唯正直にその本當のことを云ふ丈です。』

と王妃は、答へて、端嚴な姿をくづさなかつた。

審問は、二日二晩續いた。結局判事は、豫定したやうに、死の宣告を、王妃に申渡した。

『もう、何も、云ふことはありませぬか。』

と判事が、形式ばかり問ふと、王妃は、唯其の頭をふつた丈で、何とも答へなかつた。而して靜かに、コンシエルジリ！の獄へ歸つた。其の歸る途中、群衆の中から、時々〳〵、王妃を冷かに罵る聲を聞いた。王妃は、眼を閉ぢた儘、身動きもしなかつた。

一〇　舊思想の代表者

十月十六日は、王妃が、斷頭臺に上つた日であつた。王妃は、豫め遺書を認めてそれを王妹に渡した。その中には、子女の教育の事を切に頼んであつた。自分の死はもう少しも、恐るゝところがない。けれども前途ある王子王女のことは、此の悲しい日の終り迄、王妃の胸から寸刻も、忘れられなかつたのである。

十六日の朝、バリーに於ける四十八區の太鼓は、比しく鳴り出して、武裝した兵士が要所々々に配置された。午前十一時頃、王妃は、コンシエルジリーの獄から、引き

出されて、白衣を着けた儘、馬車に乘せられて、刑場へ向つた。

其の途中、王妃は『共和萬歳』『壓制を倒せ。』と云ふ叫びを、折々聞いたが、それを氣にも留めなつた。唯、何處にも秋の風に飜へつてゐる三色旗があるのを見て、何となく限りない感慨に沈んだ。殊に、國民公園となつてゐたツキルリー宮のあたりを見た時は、昔の榮華の夢が、幻のやうに、王妃の眼の前に浮んで來て、今の淺間しさに引くらべての悲しさから、何となく、重い溜息が、王妃の口から洩れた。

斯うして、王妃は、浮世の榮枯盛衰の激變を見て、流石に、その心の波打つのを、抑へるとが出來なかつた。軈て其の心を押鎭めて、昔の王妃其の儘の端嚴な姿で、足許確かに、斷頭臺の上に、起つと、數萬の群集の中から、嘲りの言葉、罵りの聲が、毒矢のやうに、王妃に向つて、注がれた。けれども、王妃は、それ等の聲に耳を傾けなかつた。其の筋肉だにも、微動させなかつた。

『人々の上に幸福あれ。』

王妃が、しつかりした語調で、祈りの言葉を洩すと、白く光つた巨斧は、冷かに、王妃の生命を奪つた。群衆は、狂熱的な態度で、其の最期を喝采した。斯うして、十五歳の春、輝く望みと美しい姿とを以て、ウイーンから、パリーへ來た國母アントワネットは、衰へはてた未亡人として、最も悲痛な終りを告げた。

嗚呼光榮の絶頂から、零落のどん底へ陷つたアントワネットの生涯は、眞に稀有なロマンスである。此の非凡の女性が、若し保守主義を代表しないで、進歩主義を代表する花となつて居たら、ルイ王家は、かほど迄にひどい運命の下に、倒れなかつたかも知れない。彼の女が、最初から、最終迄、時代の流れに逆行したのは、ルイ王家の禍でもあつた。而して、彼の女自身の禍でもあつた。彼の女は到底、新しい時代に目ざめない女性の一人であつた。時代に目ざめない女ほど、悲みの深いものはない。アントワネットの後半生は、さながらに、その悲みを象徴してゐる

逆捲く激流の中へ

逆捲く激流の中へ

（マラー）

フランス革命の恐怖時代に、一個の怪星のやうに、不思議な光りを放つてゐるのは醫師から出て革命舞臺の重要な役者の一人となつたマラーである。私は、中學時代に、教師から、マラーの話を聞いた時、それが、殘酷と狂暴との代名詞のやうに、思はれて、ならなかつた。簡略な西洋史の上に記されたマラーについては、それ以外に當時の私に取つては、別な解釋の仕樣が、なかつたからである。

けれども、其の後、カーライルなどの『フランス革命史』を讀むやうになつてから、マラーに對する考へが、大分變つて來た。殊に、ロシヤ革命の舞臺に現はれた主要な人物の性質などを調べて、その表面に現はれた狂暴さと、殘忍さとに照し合せて見てその人物が、割合に狂暴でも、殘忍でもなく、理想家らしい面影があるのを知るに及んで、マラーに對する考へ方も、以前に比較して、大方緩和せられて來た。

若し私一個の感情を、卒直に告白するなら、恐怖時代に於ける三大人物の中で、ダントンが一番、好きである。ロベスピエールとマラーとは、餘り好きでない。けれども、私は、彼等に對して、憎惡を感ずるほど、此の二人を好まないのではない。

マラーは、よくもあしくも、革命時代の有力な戰士である。彼れが『人民の友』に於て、縱横に其の筆を揮つたことは、フランス革命の進行を過激ならしめたには、ちがいないが、同時に、逸早く、フランスの腐敗と疲勞とを一掃して、新フランスを誕生させる上には、大きな力となつた。彼れは其の實際的な手腕の上では、ダントンや、ロベスピエールに、一歩を讓つたかも、知れないが、其の鋭い煽動的な筆と舌とは又、たダントンや、ロベスピエールにも、優つたところが見えてゐた。彼れの云ふところは、思ひ切つて、過激であつた。狂暴であつた。恰度、其の一字一句は、毒蛇のやうに、鋭い短劍のやうに、時には、暴風急雨のやうに、人々を刺戟しないでは、措かなかつた。此の點では、マラーは、よくも、あしくも、革命役者中の大立物であつた。

一　新しい政論家

マラーの前半生を考へると、私には、一種不思議な感じがする。彼れは醫師として、科學者として、相當に立派な地位を占めた人物である。彼れが、其の母國スキスを出て、各地に轉學して以來、雷に醫學、醫術に精通したばかりでなく、電氣學、光學、熱學をも修めた。イギリス留學時代には、政治、經濟をも研究した。斯うした經

歴から、彼れの才能は、夙に、世間に認められて居た。彼れは、スコットランドのセント・アンドリュース大學から、醫學博士の學位を受け、英國ロンドンで、醫業を開いた時は、眞先に、電氣療法を施して、評判が宜かつた。毎日、多くの患者が、續々詰めかけて、診療を求めた。それ等の事が、フランスの貴族アルトア伯に聞えて、其の侍醫として招聘されて、四十歳の時、パリーへ來た。それはフランス革命の先聲をあげたルソーが、死んでから僅かに、數年後の事で、フランス政府が、漸く財政窮乏のため、苦み始めて、途方に暮れてゐた頃であつた。

私が、マラーについて、不思議な感じがすると云ふのは、既に醫師として、科學者として、相應に成功してゐたマラーが何故、革命の風潮の中に、飛び込んで、生命がけの仕事を始めたのだらうかと云ふ事である。マラーが若し平穏な生活を續けるつもりならあく迄、醫師として、終始すればそれで宜いのである。殊に、彼れの祖國はフランスではなくて、スキスである。彼れが祖國に對して、冷淡であることは、到底人情の上からも、許されない事であるとしても、フランスに向つて、冷淡であつたとて、誰も咎めるものは無い筈である。のみならず、彼れが革命事業に手を出すと、勢ひ、アルトア伯の保守專制主義とも衝突しなければならなくなるのである。それにも關らず、彼れが急に革命の風潮の中に、飛び込んだのは、一見不思議に感ぜられる。

けれども、更らに一歩を進めて、マラーの性格や、人物を研究すると、其の革命の風潮の中へ、突進した事が無理で、なかつた理由がわかる樣に思はれる。彼れは、元來、神經過敏な方で、物事に感じ易く、動き易い傾向を持つてゐた。フランスの學士院へ論文を出して、落第したことなどを非常に不快に思つて、政府にも反感を持つてゐた。又たヂルテールや、フランクリンとも、知つてゐたので、民主的思想の洗禮をも強く受けてゐた。彼れの觀察力は、鋭くて、物の眞相に徹しなければ、止まないと云ふ風があつた。斯うした人物であつたから一度、革命の風潮が動き出すと、もう、ぢつとして書齋の中から默々と、その形勢の推移を傍觀してゐることが出來なくなつ

たのであらう。彼れは人間の病氣を療治してゐる丈では、滿足することが出來なくなつて、今度は、社會の病氣を療治しやうとして、胸に大きな不平を抱き乍ら、書齋から街頭へ出たのであらう。

斯うしてマラーは、その專門の醫者を廢めて、今度は新しい政論家として、革命時代の舞臺に、その姿を現はしたのである。

二　フランス人の性質を看破した眼

どの國でも、一番最初に、目ざめるのは、言論界の人達である。宗教、教育、文學などは、殊に左樣であるが、主として、政策の實行に重きを置く政治方面に於ても、政府に居るものよりは、民間にゐて、自由に、政治を論じてゐる人達の方が遙かに國民生活の眞相と、それから生れる要求とを、よく理解して、時代の推移に對して、最も目敏い傾きを持つてゐる。從つて一國の革命は、よくも、あしくも、先づ言論界から、其の烽火をあげるのが、恒例のやうになつてゐる。

フランスでも、大革命の炎は、言論界や、思想界から、第一に點火され始めた。ヂドロー、ルソー、ヴルテール、モンテスキューなどは、皆文筆を以て、フランスの人々の眠りを醒まさせた先驅者である。それ等の先聲に動かされて、續々革命思想を鼓吹したのは、フランスに於ける言論界の新人であつた。マラーは、その隨一人である。

マラーは、何事でも、手ぬるいことを好まなかつた。妥協、調和、左樣した方法や手段が嫌ひだつた。彼れは、フランスに、新生命を與へるために、舊生命として殘存してゐる一切の物を破壞しなければ、駄目だと信じてゐた。生ぬるい立憲君主政では眞の革命的意義、眞の自由平等を實現することが出來ない。如何しても新しい共和政治に赴かねば、フランスは、根本的に救はれないと云ふ事を、固く信じてゐた。斯うして、彼れは新共和政の建設を最期の目的としたが、其の前にあらゆる封建的餘弊と

も云ふべき殘存物を、暴風が、野の草を吹き倒し、樹木を折つて了ふやうに、排除して了はねばならぬと考へた。從つて、彼れの態度は、最初から、恐しく破壞的であつた。烈しい噴火が始つたやうに、物凄い過激な色を帶びざるを得なかつた。

マラーがフランスの政治と民情とに對して、以上のやうに考へたことは、決して、眞相を誤つて居なかつた。フランス人の性質は、到底共和政まで行かなければ、滿足しないのである。今日のフランスは、共和政の上に起つてゐる。それは、マラーが、最初から望んだ重要點であり、最終目的であつた。けれども、マラーのやうに、フランス人の根本性に徹して、政治を解し、社會を解しないものは、矢張、專制主義の保存を夢みたり、立憲君主政を以て、革命の大波を鎭めやうとしたりして、時勢に取り殘された人々も多かつた。それ等に比較ると、マラーは、早くから、フランス人の根本要求を、よく理解して居たのである。

三　二十八萬人の首

マラーの言論が、最も多く發表されたのは、彼れの機關雜誌『人民の友』であつた。マラーの破壞的な筆は、始終、自由の敵、平等の敵として咀はれてゐた貴族と僧侶とに、差し向けられた。革命の序幕時代にあつては、尙ほ貴族、僧侶の階級や、富豪一派の人々の勢力が、可なりに深く、社會に根を据えてゐた。マラーは、深く、彼等に憎惡を感じた。彼れの激し易い性質は、自然に彼れを狂熱的なものにした。

『眞に、革命事業を完成するには、二十八萬人の首を、斬らねば、駄目だ。』

マラーは、斯う傲語した。當時、社會に勢力を占めてゐた貴族と僧侶とは、合せて、二十六七萬人居たので、マラーは、それ等を塵殺にしないと、專制の根を絶やすことが、出來ないと云ふ意を、ほのめかしたのである。當時、ジャコバン一派の過激な人々は、矢張、マラーのやうに、過激なことを平氣で、云つてゐたが、それでも、

その咒咀しつゝある敵を二十八萬人も、葬つて了はうと大言したものは、一人も、居なかつた。

『私に、決死の刺客二百名を貸して呉れるなら、各自に鋭い短劍を持たせて、左手にマッフを穿めさせ、全フランス中を歩いて、片端から反對者を倒して了はうよ』

マラーは、こんなことをも、平氣で、放言した。彼れの言論は、彼れが狂激性そのものゝ如く、狂激であつた。けれども、その言葉は、必ずしも、妄想的ではなかつた。狂激の中に、實行的、豫言的な性質を帶びてゐた。彼れは、斯うして、筆に、舌に、貴族らを倒すことに、全力を傾けたが、それと反對に、社會の下層階級に對しては、熱烈な同情を持つて居た。

『愛する諸君、諸君の貧乏は、惡德のためでも、なければ、又た怠惰のためでもないのだ。諸君が、生の權利を持つてゐることは、王者たるルイ十六世と同樣である。假令天下の最高位にあるものでも、諸君ばかりを餓死させて、ひとり平氣で、生きて居られるわけのものぢやない。諸君が、パンに欠乏しつゝある時、何人も、それを冷かに見て、酒を飲み、旨いものを喰べるなどの權利は、少しも、ない筈だ。』

バリーの下層階級は、餓に苦んでゐる時、斯うした慰めの言葉を聞いて、マラーの言論に強い感動を惹起さゝるを得なかつた、マラーは、斯うして、下層階級に同情すると共に、其の筆鋒を自然、平民の身方と云ふ假面の下に其の野心を逞うする政治家や、代議士に差向けて、毒汁のやうな痛罵を浴びせかけるのを、慣習のやうにしてゐた。其の辛辣な言葉には、何人も、敵對することが、出來なかつた。『八百の絞首臺を、程よく列べて、賣國奴に比しい奴らを葬るのが、最上の策だ。』と云つたりした。彼れの言葉には、思慮が足りなかつた、緩和性が、全く欠けて居た。けれども殺氣が、バリーを蔽ひつゝあつた時代には、斯うした鋭い、殘忍性を帶びた言葉が、過

激なジャコバン黨や、下層社會のものに喝采された。其の代りに、ジロンド黨のやうな、調和を主とした穏健な人々には、蛇蝎のやうに咀はれて、マラーの名は、狂暴の代名詞のやうに、用ゐられた。

四　危機一髪

彼れが、政治に關係し始めてから、其の地位は、次第に向上したが、迫害と貧乏とは、次第に、彼れを苦め始めた。若し彼れが醫師の生活を續けてゐたら、左程、生活に困難しないで濟んだかも知れない。身命に不安を感ずるやうな迫害からも、遠く、かけ離れてゐたかも、知れない。けれども、彼れは、斯うした貧乏や、迫害に惱まされても、其の目的とする共和政實現のため、始終現狀破壞を續けなければ、止まなかつた。彼れは最初、孤獨で、起ち、孤獨で戰つた、けれども、彼れの孤獨は、次第に、其の周圍に、多くの共鳴者を得始めた。

マラーが、その反對派から、憎惡せられたことは、恐らく、ダントンや、ロベスピエールにも、優つてゐたかも知れない。政府は、常に、マラーを追跡してゐた。彼れは、それがために抑留されたり、投獄されたりした。時には、政府の追跡を逃れたため、パリーの下水の中で、一晝夜も、潛伏してゐたことさへあつた。

斯うした迫害に苦められ乍ら、マラーは、尙ほ其の筆と舌とを休めなかつた。彼れの思想に共鳴したパリーの下層民は、マラーの麾下に集つて、其の指揮を受けるやうに、なつた。それ等の下層民は、マラーの狂激な言葉にインスパイヤされて、隨分暴れた。けれども、マラーの最初に實行しやうとした破壞的な考へは、それ等の暴動を抑へやうとは、しないで、却て、それに油をかけるやうに、煽動の火を添へた。從つて溫和派の人々は、更らに、マラーに對して、『醜惡』そのものに對するやうな憎惡の度を増した。けれども、マラーは左樣な事に頓着しないで、行くところ迄、行かね

ば止まなかつた。彼れは、生命がけて、仕事を續けて居た。

それ等の事から、マラーの勢力は、ジヤコバン黨の中に、次第に重く見られるやうになつた。ダントン、ロベスピエールと列んで、領袖の一人となつた。彼れは、餘り、健康ではなかつた。それにも、關らず、彼れの活動は、更らに激しくなつた。立憲君主政を目標としてゐたジロンド黨は、先づ始末にをえないマラーから、倒さうと考へてゐた。九月虐殺(一七九二年)は、ダントンが、其の首謀者で、マラー、ロベスピエールは、これを補助したのであるが、三日間に王黨の人々や、穏健な意見を持つた人々を、一萬人ばかり、虐殺した。此の事について、第一に非難されたのは、ダントンで、次ぎは、ロベスピエールとマラーの二人であつた。

マラーの彈劾者は、マラーが、其の機關雜誌で『フランスに、執政官を置くべし。』と云ふことを述べたのを指摘し『執政官を置くことは、やがてフランスの政治を、元の專制政治に逆戻りさせる原因である。且つマラーが、フランス革命の敵を、悉く虐殺して了へと云つたのも、秩序を破り、人道を無視したことである』と非難した。

マラーは、當時、警視總監の椅子を占めて居た。彼れはそれ等の非難に反抗しやうとして、演壇に起つと『默れ！』『引込んで居れ』と云ふやうな、罵りの言葉が、ジロンド黨の人々から、烈しく發せられたけれども、マラーは、それを恐れなかつた。

『私が、執政官を置けと云つたのは必竟その人を指揮者として、一日も早く、革命の敵を葬つて、共和政の實現を急ぎたいと思つたからで、それは決して、專制政治に逆戻りするわけのものでない。』

マラーは、剴切な語氣で、政敵の攻撃を防いだ。けれども、ジロンド黨の一人は、更らに、マラーを追窮した。それに賛成した人々も、少くなかつた。何と云つても、ジロンド黨の議員が、ジヤコバン黨よりも、多かつたのである。而してマラー彈劾の決議は、略ぼ通過しやうとした。それは、マラーに取つて、危機一髪と云ふ場合であつた。

五　マラーの人望

マラーは、急に熱狂した、彼れは、必死になつて、反駁し、熱論した。其の頬は、輝き、その眼は、血走つた。痩せた身體が、盤石のやうに、根を据えて舌の先きから火を吐かうとするやうに見えた。それがため、彈劾決議は、大分、鈍つて來た。マラーは、その機を外さずに、忽ち一挺のピストルを取り出して、それを自分の額に翳し乍ら、鋭い刃のやうな聲で云つた。

『諸君、若し只今の彈劾決議が、見事、通過したら、私は、此のピストルで、私の腦天を打貫いて、此の場で倒れる積りである。』

マラーは、斯う叫んで、更らに、彼れの信念を、人々の前に、露骨に披瀝した。

『彼の二十六萬餘の貴族黨について、私は其の賣國奴たる所以を觀破した。彼奴らの假面を剝ぐ事は、地球上、何等の權能も、これを妨げることが、出來ない。』

マラーの警句は、その身方の喝采を得たのみならず、其の敵の心をも、動かした。彼は、斯うして、彈劾決議から、巧みに、逃れたが、それでも、未だ安心してゐることは出來なかつた。敵の追究の手は、中々それぞれば、止まなかつた。マラーの一身は、最も危險に瀕してゐた。彼れは、思ひ切つて、一時、イギリスへ逃げた。

其の後、マラーは、又たパリーへ歸つて、ジロンド黨を倒すことに熱中してゐた。マラーの毒舌は、絶えず、ジロンド黨に向つて鐵砲玉のやうに、飛んだ。ジロンド黨はマラーの言葉尻を捕へて『公安を害するものだ。』と云つて、無理にマラーを引捕へて、革命裁判所へ送らうとした。マラーは、一言、それに答へやうとしたが、思ひ返して、裁判所へ至つた。

裁判所には、マラーの身方のみ居た。彼等は、形式ばかり、マラーを審問したけれども、有罪の判決を與へなかつた、マラーは、安全であつた。それから、間もなく、

マラーに共鳴してゐた賤民は、マラーが捕へられたと聞いて、一齊に起ち上つて、革命裁判所へ押寄せた。

『マラーさんを返へして下さい。』

彼等は、大聲で、斯う云つて、到頭、マラーを助け出した。その中の壯漢は、マラーを肩に荷ひ、婦女は、ローレルの冠をマラーの頭に載せて、愛國の歌を合唱し乍ら、引上げた。斯うして、マラーは、其の危機から、逃れた。

けれども、マラーは、寸時も、油斷出來ない境涯に居た。何時刺客が來て、彼れを襲ふかも、知れなかつた。さらぬだに、健康を害されてゐた彼れは、此の頃、全身が、熱のため、ヅキン〳〵痛んで、始終、一室に閉ぢ籠つて溫い湯の中に、浸つて居ないと、痛みを忘れることが、出來なかつた。夜も、碌々、眠れないので、其の神經は、一層、尖り出した。

六　誠意ある惡魔

ジャコバンとジロンドとの爭ひは、マラーらの力で、到頭ジャコバンの勝利となつた。空論ばかり多くて、策戰に拙劣なジロンドの人々は、暴力の下に、パリーから、追ひ拂はれて了つた、彼等は、それでも、未だ地方の紳士階級に身方を持つてゐたので、何れも、勢込んで、田舍の方へ赴いた。彼等は『無政府的なジャコバン黨を倒さねば、止まない。』と盟つた。

中にも、カン府に集つたジロンド黨の人々は、殊に氣焰が高かつた、其處では、ジャコバン反對の聲が、日夜、波濤の叫びのやうに聞えてゐた。『元兇マラーを葬れ！』と云ふ聲も、中々、旺んであつた。マラーの言動は、一番、惡く、憎惡の中心となるやうに、傳へられて居た。カン府の住民は、マラーを現世の惡魔のやうに、咀つた。斯うした空氣の中から、マラーを暗殺したコルデーのやうな女が、出たのも、自

然てあつた。

マラーが、美人コルデーに殺されたのは、女と思つて、油斷した爲めであつたが、その頃、マラーの衰弱は、非常に、ひどかつたので、コルデーに抵抗する力さへ、なくなつて居た。彼れが、隣室にゐる老婆を呼んだ時は、もう呼吸が、絶え〳〵になつて居たのである。その時、マラーは、貧乏のどん底に沈んで、五十錢の現金と粗末な卓子とを以てゐるに過ぎなかつた。暴風のやうに咆えたマラーは、微風に吹かれた葦のやうに、はかなく、世を去つた。

マラーの死は、ジャコバン黨を昂奮させた。過激革命派の人々は、何れも、マラーを惜んだ。その哀悼演説は、此處彼處に開かれた。これによつて、マラーの名は、更らに、高まつた。

マラーは、狂暴であつた。彼れは、フランスを無秩序の中へ、投げ込んだ。それ等はマラーが免れ難い罪であつた。けれども、其の罪は、コルデーの暗殺に逢つて、殆ど消滅した。彼れが、罪の償ひは出來た。今日、彼れの狂暴と殘虐とは、尙ほ人々の彈斥するところとなつてゐるが、彼れが、貧乏と迫害とを忍んで迄も、生命を的にして、革命のため、始終、奔走し、絶叫したことを思ふと、彼れには、全く誠意が、なかつたとは、云へない、誠意ある惡魔！、熱狂した時代精神の一部を代表するモンスター、私は、マラーを、斯う呼びたいやうな氣がする。

黒い恐怖時代の幻影

黒い恐怖時代の幻影

（ロベスピエール）

人々の中には、一生同じやうな生活を續けてゆくものもあれば、前半生と後半生とが、全く一變したやうな巡路を辿る者もある。始めは、質實な、淋しい生活をし乍ら、後には、花やかな、活動的な生活をする人も、可なりにある。豫期しない人が、豫期以上の範圍をさへ、強く衝き破つて、俄かに新しい世界に於て、其の個性を輝かすものもある。ロベスピエールのやうな人物は、その一人と云つて宜い。

ロベスピエールの前半生を見ると、彼れは到庭物靜かな書齋の人にふさはしかつた。小忙はしい街頭に起つて、革命の大波の中に激しく揉まれ乍ら、白刃の間を拔けて活動する人とは、絶對に思へなかつた。青年時代の彼れは、ルイ、ラグランド大學て、哲學と法理とを講究した一學究で、眞面目で、律義で、道德的良心の鋭い男であつた。彼れは、大學を出てから、故郷アルラスへ歸つて、辯護士となつたが、其の後、アルラス主教の推薦で、兎も角も、生活のため、裁判所判事となつた。

此の判事をしてゐた時代に、ロベスピエールに取つて、記憶すべき出來事が持ち上つた。彼れが或罪囚を裁判した時に、これに對して、如何しても法律上からは死刑の宣告を與へねば、ならなくなつたことがあつた。けれども、ロベスピエールは、何となく、その罪囚を助けてやりたかつた。如何に重い罪を犯したとしても、死刑に處するのは、餘りに殘忍てある。法律は、如何に、冷かに、それを命令しても、自分は、それに、從ふことが、出來ない。ロビスピエールは、斯う決心して、判事の地位を去つた。それ程に、彼れの道德的良心は、鋭く光つてゐた。

彼れは、又た文學趣味を愛して、自分も、時々、詩作した。溫雅な自然の風趣をも好んて、靜かな冥想に親んだ。斯うした傾向の人物であつたから、街頭の人となるよりも、より多く、書齋の人にふさわしかつたのてある。要するに、ロベスピエールの前半生は、平和すぎる位、平和であつた。

一　內面的に發育した人

けれども、此に私が特に興味を以て、見たいと思ふのは、彼れの內面生活てある。カーライルも、そこ迄は、深く、ロベスピエールを透視してゐない。思ふに、ロベスピエールは、アルラスに於ける知識階級の俊秀として、當時のフランスの現狀や、その前途について、深く內部に直覺したものを持つてゐたに違いない。外面か

ら見ると、アルラスに於けるロベスピエールの生活は、平靜の二字に、盡きる。けれども、內面では、その心の一波一瀾が動いて、少しも、絶えなかつたにちがいない。長い間、不自然に虐げられた民衆の生活を、正しく、素直にするには、如何したら、宜いか。何を措いても、鐵鎖のやうな、在來の制度律法をひつくりかへして了はねば、ならぬと云ふことを、切實に感じて居たにちがいない。

自分らの前には、新しい時代が來てゐる。その時代の使命を、はたす任務は、自分のやうな青年の手にある。不自由から自由へ、不平等から平等へ、專制政治から共和政治へ移るべき道を切り開いてゆかねば、行詰つてゐるフランスは、內面から、死んで了ふのだ。ロベスピエールは、それ等の事を思つて、時々、夜も眠られないことが、可なりにあつたらう。彼れは、斯うして、その重い任務を自覺すると共に、一層、學理の討究にも、力を入れたであらう。ロベスピエールは、人々が知らぬ間に漸次、內面的に發育してゐたのである。

アルラスの人々は、ロベスピエールの篤學と律義な點とに、深い信賴を置いてゐた。其の青白い憂鬱に滿ちた顏と、背が低くて、痩せた體格とを見たものは、單に、ロベスピエールを、君子らしい人とのみ、思つたにちがいない、而してロベスピエールが、內面的に、其の新生命の泉を堀り出さうと、あせつてゐたことについては、存外、氣が付かなかつたかも、知れない。

二　一本調子の理想家

ロベスピエールの生涯に、最初の轉機を齎したのは、彼れが、アルラス選出の代議士として、始めて、國民議會の一席を占めた時であらう。彼れは、三十歲ばかりの少壯代議士として、靜かな書齋から出て、始めて街頭の人となつたのである。

ロベスピエールは、自分が、政治家として、如何位の力量あるかを考へるよりも、

寧ろ彼れが、ルソーなどから鼓吹された自由平等思想をその儘に實行しやうとすることについて、急激であつたやうに見える。實際的な政治家と云ふよりは、空想的な學究と云つたやうな傾きがあつた。

議會に於て、最初、小さい、青白い彼れを見たものは、恐らく、ロベスピエールの存在を無視したかも、知れない。けれども、若し一歩進んで、彼れに接觸すると、其處に動かし難い眞劍さと律義さとがあつて、自然、人を引付けるところがあるのを、見出したにちがいない。

ロベスピエールが、政界に於て、其の頭を括げ出したのは、ミラボーの死後からであつた。ミラボーのゐた時分は、すべての議員は、殆ど其の影に蔽はれてゐた。恰度ミラボーが、太陽なら、他は群星のやうであつた。太陽の光りは、群星の光りを消してゐた。ミラボーが、此の世を去ると間もなく、ローランやダントンやマラーなどが、政治上の一勢力として、輝き出した。ロベスピエールも亦、其の數に洩れなかつた。

ジャコバン倶樂部では、ロベスピエールの舌が、能く動いた。彼れは、數時間に亘長演説をするとが、珍しくなかつた。ロベスピエールの長演説は、割合に平凡で、無味であつたに關らず、一千五百の聽衆に倦怠を與へなかつたのは、其の眞劍さ、眞面目さ、熱心さによつたのであらう。彼れは、人々を快く喜ばせる演説師では、なかつた。さればとて、眞面目な假面の下に、虚僞と野心とを包藏してゐる政治屋でも、なかつた。恐らくロベスピエールの尊いところ、强味のあるところは、演説師でも、なければ、政治屋でもなかつた點にあつたらう。彼れは、一種の清い理想家で、其の夢みつゝある自由平等の世界を、一日も早く現出させたいと、そればかり思ひつめて、その叫びを、いつ迄も、長く〳〵續けることを止めなかつたのである。

ロベスピエールは、純な一本調子な理想家であつた。從つてその理想を追ふの餘り、極端な改革者の一人となつて了つた。前途に目ざす目標に向つて眞直に側目もふ

らず、突き進もうとするやうになつた。彼れが、王を讐敵のやうに咀つたのは、それがためである。以前、罪囚に死刑の宣告を與へねば、ならないことを氣に病んだ彼れの心は、尙ほ廢王說を主張したロベスピエールの胸の中に動いてゐたのである。

三　烈しい神經質

ロベスピエールの生涯に、再度の轉機を與へたのは、彼れが、「ジャコバン黨の領袖として、次第に、世間の注意を、其の一身に集め出した時代であつたらう。彼れは其の頃も、矢張青白い小さな男だつた、けれとも、彼れの目は、いつも、憂鬱にばかり、曇つてゐなく、なつた。時には、明るい光りに、輝いた。而して、その不安の色は、次第に、決心の色に變つて至つた。それでも、始めの間は、尙ほアルラス時代に於ける律義と神經質なところを多量に持つてゐた。

彼の恐るべき九月虐殺の時、勤王黨や、反革命者が、多數、殺された中に、ロベスピエールが、慥かに無罪だと信じた男が唯ひとりあつた。それを思つて、ロベスピエールは、非常に悲んだ。

『可憫さうな事をした。それは、大きな罪惡だ。』

ロベスピエールは、頻りに、道德的良心に責められて、苦悶した。而して、その事を、ダントンらに訴へて、其の神經質なことを、自分で裏書した。斯うした人が、後には、その昂奮した精神狀態に驅られて、何百人でも、何千人でも、平氣で、それ等の人々の生命を奪ふため、斷頭臺へ送るのを快いやうに思ふ人となつたのは、眞に不思議である。それは、彼れの地位と仕事との上から、自然、左樣した過激な方面へ突進んで了つたものと、見るより外は無い。彼れが、理想の夢として憧憬れてゐたことが、次第に、現實化されて行かうとするのと、彼れが意外の勢力を得たこととが、その猪突に、强い油を注いだことなども、彼れの性質を一變する上に、力があつた。

更らに、もつと深く附入つて云ふと、此の神經質な一學究の革命的精神が、始終、強く働いてゐて、それに對する懸命な、眞劍な態度が、やがて彼れを過激な殘忍家のやうにして了つたのであらう。

四　敵黨の追擊

ロベスピエールらが、王黨に對する態度は、極端に憎惡に滿ちてゐた。彼れは、それ等の王黨を倒し、反對派を絶滅する目的で、九月虐殺前、國事裁判所長となつた。而して、其の權力を亂用して、王黨を苦め、反對派をも苦めた。殊に、ロベスピエール等が、考へ出した革命裁判所は、後の恐怖時代を生んだ機關であつた。此の裁判所は、二院に分れてゐた。各院に四名の判事と、一人の檢事がゐて、被告に判決を下す場合には、一名の陪審官を立會はせるやうに定められた。而して、その判事、檢事には、大抵、過激な革命派の人々が、選擧された。斯うして、ロベスピエールは、自派の勢力を固めてゆくことに、力を盡したので、王黨も、ジロンド黨も、ロベスピエールを憎んだ。

九月虐殺の事があつてから、新たに議會が開かれると、ジロンド黨は、一致して、先づジャコバンのダントンを排した。マラーとロベスピエールとを擊つた。

『ロベスピエールは、執政官とならうとする野心を抱いてゐる。』

此の事が、主として、ロベスピエール非難の焦點であつた。けれども、彼れは、此の事については、柔和な聖人のやうな態度と、細い、はつきりした聲とを以て、辯解した。ところが、ロベスピールに對する非難は、唯、そればかりで止まなかつた。

『此の上、誰も、私を彈劾するものは、あるまい。あれば、不思議である。』

とロベスピエールが、調子に乘つて云ふと、

『ロベスピエール、私は、君を彈劾する、私はルーゼーだ。』

と云つて、ルーゼーが、演壇の方へ、早足に進みよつた時は、流石のロベスピエールも、稍逆上した。ルーゼーは、一々、ロベスピエールの罪を數へ上げた後、

『九月虐殺の煽動者は、ロベスピエールその人である。』

と斷言すると、ジロンド黨の人々は、急に騷ぎ立つて、

『奸賊を倒せ。』

と叫んだ。人々は殆ど總起ちになつた。ロベスピエールは、未だこんな切迫した危險に逢つたゝが、一度も、なかつた。ルーゼーは、ロベスピエールを死刑に處すべきことを、極力、主張した。ロベスピエールは、愈よ危險を感じた。彼れは、必死とならざるを得なかつた。何とかして、其の場を切り拔けねば、ならぬことを、痛切に感じた。彼れは漸と決心して、ルーゼーの說は、決して事實でないと云ひ張ると共に、辯解のため、一週間の猶豫を請ふた。それだけは、僅かに許された。ロベスピエールは、ほつと、胸を撫て下した。

五　死生の境から逃れて

其の後の一週間は、ロベスピエールが、死ぬか、生きるかの問題を決する大切な時であつた。ロベスピエールは、寸時も、安閑として居なかつた。其の黨員らも、ロベスピエールを助けるため、四方に奔走した。一週間目に、ロベスピエールが、議會へ現ははれて、ルーゼーらの非難に答へた時は、大分、落着いてゐた。彼れは、いつもの細い聲で、靜かに、辯解した。その言葉は、比較的に敵にも、同情され易いものであつた。ジロンド黨は拍子拔けがした形であつた。それに、ルーゼーは、何の用意もない爲め、再びロベスピエールを追ひつめなかつた。當時、國王處分の大問題で、人々は、その方へ、大方、氣を取られてゐたので、それ以上、ロベスピエールの事に拘

泥してゐる遑がなかつた。

斯うして、ロベスピエールの危機は去つた。彼れは、幸運にも、此の危機を飛び越した爲め、一層、其の身方の同情を得た。その後、ロベスピエールの歩む道は、割合に、平坦になつた。彼れは、彼れの思ふ通り、ずん〳〵進んだ。

ルイ王の處分問題について、一番直截な、過激な說を主張した一人は、ロベスピエールであつた。彼れは、ルイを共和政の妨害者として、その有罪を唱へて、死刑に處するのが、正當だと云ひ張つた。ルイ王に同情した人々は、ロベスピエールの直截な言葉を咀つた。

けれども、議會の大勢は、矢張、ロベスピエールの主張した通りに、なつた。ジロンド黨の人々の中には、ルイ王を思ふものが、相當にあつた。それ等の人々は、王を助けやうとしたが、唯ジャコバン黨のために、王黨に內通したやうに讒誣されて、その上、暴民の迫害を受けるかも、知れないと云ふ事を憂懼したので、心ならずも、死刑說に贊成して了つたものが多かつた。それでも、內心、深く王に同情したところから、斯うした大勢を造り出したジャコバン一派の人々を憎んだ。

王が、愈よ死刑に處せられて、革命事業の前に横はつた大きな難關が一つ、取除かれると、ジロンドとジャコバンの勢力爭ひが、以前にも增して、激しくなつて來た。ジロンド黨は口舌の上で、ジャコバンに優れたが、力の上では、ジャコバンに及ばなかつた。ダンドンの勇氣とロベスピエールの智術とによつて、賤民を背景とし乍ら、議會を威嚇した時は、ジロンド黨の人々は、殆ど壓迫されて了つた。十二名の公安委員を廢するか、廢せぬと云ふ問題についても、ジャコバン一派の廢止說が勝つた。六月(一七九三年)のクーデターには、ジロンドの人々が、大方、根こそぎに、追ひ拂はれ、獄中へ投げ込まれた、

斯うして、ロベスピエールの時代が、次第に近付いた。青白い顏をした律義な、神經質の一學究は、不知々々、フランス政界の中心勢力に推された。

六　ロベスピエールの時代

ロベスピエールは、今迄、ダントンと握手し乍ら、進んで來た。それはジロンド黨の勢力に當るために、外ならなかつた。そのため、假令、ダントンと意見の上に、相異があつても、成るべく、我慢して來た。けれども、政治家として、溂達なからりとした氣象のあるダントンと、神系質で、周圍に對して、その親近の外は、警戒性をゆるめないロベスピエールとは、如何しても、一致しなかつた、ダントンは、それ等の事を、左程、氣にしなかつたが、ロベスピエールは、それを氣にした。そればかりでなく、マラーが、倒れて、兩頭政治となつてから、ロベスピエールか、ダントンか、その何れかが、專權者となるべき時代が、眼の前に逼つてゐた。

ロベスピエールは、此迄、自己の地位を築き上げ乍ら、今更、ダントンに、すべてを讓り渡すのが、惜しかつた。政治的に云へば、ダントンは、ロベスピエールよりも、一段立優つた豪傑である。ロベスピエールが、其の地位に執着する考へがなければ、ダントンに、第一位の椅子を讓つて、自分は、第二位の椅子に就いた方が、無事であり、有利でもあつた。けれども、ロベスピエールは、それを我慢することが出來なかつた。是でも、非でも、ダントンを倒して、自分の理想と政策とを行ふべき新しい時代を作り出して見たかつた。

ロベスピエールは、全力を擧げて、ダントンを倒す事に、熱中した。そのため、百方手段を講じて、ダントンを中傷した。彼れは、新公安委員會を自分の身方に引入れて、ダントンの罪狀を數へさせた。ダントンが油斷してゐる所を、不意に捕縛させて、公平な人々の感情を害した。ロベスピエールは、一時、非難の中心となつた。

けれども、ロベスピエールは、それ等の非難を、蚊の聲ほどにも、氣にかけなかつた。彼れの背後には鐵の手とも云ふべき武力があつた。彼れは、此の鐵の手を頼ん

て、落着き拂つてゐた。

『諸君、妄動しては、不可ない。フランスが大切か、ダントンが大切かと云ふことを御考へなさい。國賊ダントンは當然葬らねば、ならぬ。』

ロベスピエールは、はつきり、斯う言ひ切つてから、その身方と頼むサンジユストに、ダントンに對する彈劾演說をさせた。それ等の事は、すべて、不合理であつた。若しダントンの罪を數へて、それを葬る必要があるとしたら、ロベスピエールとても、恐怖時代を生み出した責任者の一人として、葬り去られねば、ならなかつた。

けれども『力』の前には、正義も、眞理も、蹂躙られて了ふことが多い。當時の議員の中には、可なりに、ダントンに身方をしたものが、多かつたが、ロベスピエールの武力的威嚇に逢つて氣が進まぬ乍らも、到頭、此の不合理な彈劾を通過させた。

ダントンを倒してから、ロベスピエールの時代が來た。今迄、ロベスピエールがしたことは、悉く破壞的の事のみであつた。又た烈しい破壞をしなければ新しい家を建てることが出來なかつた。けれども、ロベスピエールは、もう破壞的な仕事には、飽き出した。これからは、新しい建設に取りかゝらうと考へ出した。彼れが、エーベルらの無神論を斥けて、分明り切つた有神論を唱へ出した動機は、此から、來てゐる。

七　彼れの心機一轉

恐怖時代の創造者、吸血鬼の王とも、云ふべきロベスピエールが、愛と善德の化身、である神を崇敬めて、靈魂不滅を主張したのは、大きい矛盾の樣に、見える。けれども、能く考へて見ると、それは、矛盾ではない。元來ロベスピエールは、理想家で、宗教の方にも、可なりに、研究を重ねた人である。彼れが、政界へ乘り出して、革命のため、夢中になつたのも、必竟、彼れの美しい純な理想を早く現實にしたいためであ

つた。彼れの本心は、恐らく、人命の多くを犠牲にして迄も、革命を斷行しやうとは、思つて居なかつたかも知れない。けれども一度乘りかゝつた馬は、その儘、直ぐに下りることが出來ない。轉落し始めた石は、或定着點まで、達しなければ、止まない。

ロベスピエールは、革命の坂の上に、轉落し出した石のやうなものであつた。彼れは、一度轉落し。二度、轉落して、次第に、思はぬ方へ轉落した。人間の吸血鬼と迄咀はれるやうな破目に陷つたのは、それが爲めである。けれども、今度は、その破目から、脫して、暗い不安なフランスを明るい、秩序のあるフランスに直さねばならぬと氣が付いた。彼れは、その志向の第一歩として、有神論を主張して、靈魂不滅を說いた。而して唯物的な。暗い人心を、靈性的な方へ導いて、革命事業を破壞から、建設的な方向へ導き出さうとしたのである。

けれども、彼れの周圍にある人々は、そこ迄、深く考へゝゐなかつた。ロベスピエールが神を祭るのを見て、却て、それを一場の喜劇とした。その上、ロベスピエールの手足となつてゐたクートン、サンジユストは共に、權力を亂用して、ロベスピエールが、稍飽き始めて居た虐殺を、又た平氣で毎日、續けた。而も其の虐殺された人々の中には、罪のない有爲の人々が、少くはなかつた。それ等の事は、ロベスピエールの人望を、非常に惡くした。

それにも關らず、ロベスピエールの方針は、矢張、威壓の一方に傾くことを免れなかつた。神經質で、疑ひ深い彼れは、一日も、その威壓の手を、ゆるめることが、出來なかつた。威壓は彼れを支持する力であつた。此の威壓に對しては、現に議會に居て、ジャコバン黨に席を置きつゝある人々さへ、日夜それを咀つて、不安の念を抱いて居た。クートン、サジユストらは、何時、彼等を讒誣して、生命を奪ふかも知れないからであつた。それに、ロベスピエールの疑ひ深い眼が、ぎろりと光る場合には、大なる危險が、暗示される場合が、多かつた。

此の頃からロベスピエールは、議會へ餘り顏を出さなかつた。保安委員會の方へも

全く行かなくなつた、彼れは、多くの護衛者に擁せられて、其の意志を、クートンらに傳へて、生殺與奪の權を亂用してゐた。必竟、今迄の過激な荒々しかつた生活と、いろ〳〵の苦悶や、思索とが、彼れを疲勞させて、沈鬱のどん底へ導いた爲めであらう。又た彼れの理想を具體的に實現すべき土地財産の分配、勞働者保護などのことを胸に描いて、激しい空想に捕はれてゐた爲めでもあらう、何れにしても、ロベスピエールは激しく、疲れ出した。

八　反ロベスピエール熱

ダントンの末路と同じ運命が、やがて、ロベスピエールの上に來た。反ロベスピエール熱が、絶頂に達したからである。それ等の人々は、ロベスピエールが、一大クーデターを起して、議會を威嚇すると共に、反對者中の有力な人物を一氣に葬り、ロベスピエール自身が、フランスの執政官として、其の專權を恣にしやうとする計畫のあるとを早くも、嗅ぎ付けた、それればかりではない、此に興味ある一挿話として、ロベスピエールの隱謀を見出した事件があつた。

それは或夏（一七九四年）バレールが、その邸宅で、宴會を開いた時、ロベスピエールも亦招かれて、其の席へ出た。ところが、暑氣が、非常に强かつたので、人々は皆、其のコートを脱いで、客室へ置いた。その時、反ロベスピエールの傾向を持つてゐたカルノーは、人知れず、客室へ忍んで至つて、ロベスピエールのポケットの中に入れてあつた名簿を引出して、四十人の名士を刑戮することが記されてあるのを見た。その中には、カルノーの名もあつた。

カルノーは、驚いて、用事にかこつけて、直ぐ家に馳せ歸つて、人々に、警醒を與へた。このことは、反ロベスピエール熱を煽動する上に、大きな力となつた。ロベスピエールの名簿の中に記入されてゐた人々が、全力をあげて、一致して、ロベスピエー

ルを倒さうと意氣込んだのである。

ところがロベスピエールは、左様した隱謀のあるのを、未だ知らずにゐた。流石に警戒の手を、ゆるめない彼れも、此の頃は、大分、慢心してゐた。自分が、議會へ出ると、すべての議員が、その眼の前に、無條件で、屈服するやうに、思つてゐた。ロベスピエールの時代となつて以來、議會が平生、盲從するやうに。

ところが、議會の形勢は、少し宛、變りかけてゐた。七月下旬(一七九四年)ロベスピエールが、議會へ出てその暗い顏を、苦々し氣に、しかめて梟のやうな聲で、唸り出した時、議員の中には、大分、不服の色を現はしたものがあつた。

『諸君、今や共和的精神は、地に落ちた。腐敗した溫和說が、多くの人々を風靡してゐる。私一人のみは、絕對に腐敗しない積りだ。そこで、現在の腐敗を如何して、防ぐかと云へば一層、速かに斷頭機を動かして、共和主義の背叛者を根柢から、亡ぼすより外はないのだ。』

ロベスピエールが、斯う述べて了ふと、平生のやうに、贊成の聲が、起るだらうと思つたのに、一つも起らなかつた。その代りに、多く議員の顏には、抑へ切れない憤怒の色が、歷々動いてゐた。

『ロベスピエールを倒せ。』

『暴虐な奸物を葬れ！。』

斯う云ふやうな呼ぎさへ、幽かに聞えた。此の時、ロベスピエールの服心者は、急に起ち上つて、今話したロベスピエールの趣旨を印刷して、全國へ廻はしたいと云ふ動機を出した。これにも、贊成者が少かつた、『印刷猶豫』を求めた者が多かつた、或議員は、眞赤な顏をして、ロベスピエールに向つて、努鳴り付けた。

『本議會は、充分、言論の自由を保證せられて居る。然るに、今やその自由は、何處に消え失せたのか。』

此の詰問に贊成したものが、極めて多かつた。それで、ロベスピエールの演說は、

印刷されないことになつた、何事でも、ロベスピエールや、其の配下の云ふなり次第になつてゐた議員は、いつの間にか、全くロベスピエールに叛かうとしてゐた。

それは、ロベスピエールに取つて、大きい凶兆であつた。彼れの暗い顔は、全く青ざめきつて、死人のやうに、見えた。彼れは何とかして、此の大きい難關を跳び越えねば、ならぬと思つて、早々議會を出た、ロベスピエールが、勝つか、その反對者が勝つか。すべて、明日(七月二十七日に)決せられるのである。

九　最大の危機

ロベスピエールは、前日、一氣に、其の反對黨を抑へ付けて了はなかつた爲め、二十六日の夜は、ジャコバン倶樂部へ至つて、議會に於ける不利な形勢を述べて、其の援助を求めねば、ならなかつた。ジャコバン黨の人々は、素より、彼れに同情した。彼等は、反ロベスピエール派の無禮を怒つた。而して『生命がけで、ロベスピエールのために戰はう。』と叫んだ。その他、ロベススピエールの手足となつてゐたクートン、サンジュスト、ルバーらも、反對黨を倒す秘密會議を開いて、殆ど夜を徹した。護國軍總督アンリオーや、パリー市長らも、矢張、ロベスピエールの身方であつた。

それに對して、反ロベスピエール派も、徹夜して、秘密會議を續けてゐた。フーセも、カリエーも、バルラも、ブールドンも、前に云つたカルノーも、雄健な戰ひの人タリアンも、皆これがために、其の腦漿を絞つた、彼等の策戰は、眞夏の夜明け近くになつて、漸と定つた。皆眞劍であつた。

その日(二十七日)の議會は、何となく、緊張してゐた。議員は、早くから續々、議席へ詰めかけた。ロベスピエールは、聊か頼むところがあるやうに、サンジュストらを從へて、演壇の前にある最高所に陣取つて、威嚴を作つてゐた。

愈よサンジュストが、その第一聲を放つ前、議場は、しいんとして了つた。而も其の靜かな中に、大きな時の波の動きがあつた。死の魔神ロベスピエールを一氣に倒さうとする灰色の兇兆が、何處となく、隱暗と漲つてゐた。

サンジュストは、懸命になつて、ロベスピエールの辯護を始めた。それは、原稿の朗讀であつた。ロベスピエールは、得意の色を青白い頰に浮べ乍ら、其の疑ひの眼を、八方に動かしてゐた、その眼は、誰と誰とを叛逆人として、死刑にしやうかと、物色してゐるやうに見えた。此迄は、無事であつた。ところが、サンジュストが、その原稿朗讀を僅かに數節ばかり、讀み續けたところで、突然、一大妨害が起つた。

殺氣を帶びた聲が、四方から、洪水のやうに起つた。サンジュストの聲は、それに遮られて、何も、聞えなくなつた。而して、間もなく、戰ひの人タリアンは、ロベスピエールの方を睨み乍ら、屹と突立つた。

一〇　暗殺組の議長

タリアンは、決死の色を見せて、手嚴しく、ロベスピエールを攻擊した。

『若し議會が、暴君（ロベスピエール）を征伐しなければ、私自身、進んで、其の任に當らう。』

タリアンの言葉は、鋭く、ロベスピエールの心腹を衝いた。而して、タリアンは、瞬く間に、白刃を手にして、それを振廻はした。滿場の議員は、殆どこれに共鳴して、何れも白刃を手にし乍ら『贊成！、』と叫んだ。

『壓制だ。』

『咀ふべき執政者だ！』

『憎むべきトライアムヴレートだ。』

こんな聲が、起つて、一齊に、呪咀の叫びをあげた。公安委員らは、又たロベスピ

エールの罪を擧げて所罰を要求した。眞に、それ等は、ロベスピエール一派にとつて、晴天の大霹靂だつた。

サンジユストは、全く立往生の體で、靑くなつてゐた。クートンは『嗚呼三頭政治だ。』と嘆息するやうに云つた。斯うなつては、ロベスピエールのみが、其の頽れかゝつた勢を新たに盛り返さねば、ならなかつた。彼れはすべての事が、意外に自分の方へ惡くなつたので、その聲も、稍慄えを帶びて來た。

それと見た議長は、急に振鈴を手にして、打振り、又た打振つた、ロベスピエールの聲はそれに妨げられた。滿場の議員は、それと共に、怒鳴つて、叫びの大波が、一齊に起つた。ロベスピエールは、赤い憤りに燃えた。

『暗殺組の議長閣下、私に最期の發言を許されたい。』

ロベスピエールは、睨むやうに、屹と議長の顏を見つめた。議長は、始めから、其の發言を許さなかつた。ロベスピエールは、戸惑ひしたやうに、傍聽席にゐる壯士の群を見やつた。

『私は、一に、諸君の義氣に訴へる。』

彼れは斯う云つた儘、もう口を動かさうとしなかつた。それよりも、先きに、彼れの舌が、乾いて、殆ど上腮に附いて了つたのである。

『有罪の議決を……。』

『勿論、死刑だ。』

こんな叫びが、決然たる調子で起つた、議長は、直ぐに、それを議題にした、而もそれが呼吸を、繼ぐ間さへない間に一氣に可決された、もう、ロベスピエールは、手も、足も、出すことが、出來なくなつた。彼れは、その弟や、服心のものと共に、捕へられて、間もなく、淋しい末路を遂げた。

一　苦き應報

ロベスピエールの末路を見ると、その歩むべき道を行き過ぎた傾きがある。けれども、時代精神の一面を代表した彼れは、一度、その革命の道に踏み入つてから、行くところ迄、行き着かないと仕様がなくなつた。勿論、彼れとても最初は、それを意識して、自己の性格と矛盾するところがあるのに氣付いたにちがいなからうが、その考へも、時と共に磨滅して了つて、到頭、血に渇いた魔神のやうに、目的のため、手段を撰ばない人になつた。それでも、尙ほ彼れの胸には昔の俤が、殘つて、いつか其の前非を改めやうと云ふ氣が、仄かに動き始めた頃に、萬人の呪詛の下に倒れて、フランスは、暗黑時代から、光明時代に入る過渡期となつた。

外面から見ると、ロベスピエールの後半生には、憎惡に價する點が多い。けれども、その內面に立ち入つて、見ると、彼れが、理想から現實へ、書齋から街頭へ、美しい空想から醜い政治界へ突進した時の矛盾、苦悶の跡が見えて、そこに、一種の哀愁を誘ふものがある。彼れとても、根から血に渇いてゐた魔神ではなかつた、隱險な疑惑の人でもなかつた。アルラス時代の美質は、その最期までも、尙ほ其の一部分を殘して居たのである。

猛獅の如くに

猛獅の如くに

（ダントン）

フランス革命時代の巨星ミラボーが、パンテオンに葬られてから、彼れの後に、現はれた名ある政治家は少くなかつたが、ひとり、ミラボーと、肩を列べる丈の人物は、殆ど見當らなかつた。唯僅かにダントンのみは、ミラボーに對して、左程、光りの薄いものでは、なかつた。

ダントン！

彼れの名の語調からして、既に豪快である。恐怖時代に於て、一番、實際的に動いた彼れは、或意味に於て、マラーよりも、ロベスピエールよりも、憎惡を價する所が多いかも、知れない。けれども、私等の感情は、不思議に、ダントンにのみ對して、左程、深い憎みを感じないのは、何故だらうか。それは、ダントンの人物が、豪放で、明けつぱなして、決斷が早くて、眼前の時局に向つて、ぐん〳〵適應して行く男らしさを持つてゐたからである。

ロベスピエールには、何處となく、暗い、しめつぽいところがあつた。マラーには、蛇のやうに、毒々しい光りがあつた。けれども、ダントンには颶風のやうな狂暴があつても、一體に、晴々した調子を持つてゐる。ロベスピエールも、マラーも、時として、表面に起つて、激しく、其の鋭さを見せることがあるが、それでも、何となく、眞の政治家らしい襟懷と云つたやうなものが、なかつた。一體に、その人物の輪廓が小さくて、調子の低いところさへ見えた。

けれども、ダントンになると、政治家らしい襟度もある、いろ〳〵の人物を容れる胸の廣さもある。調子も低くなければ、その輪廓も、小さくはない。矢張、巨星ミラボーの次ぎに、置いて宜い。殊に、亂脈時代のフランスでは。彼れを要することが多かつた。彼れは、虚飾や、空言に囚はれなかつた。眞率で、天眞を隱くさなかつた。而して、如何な難局に起つても、狼狽えずに、フランスの進路を、大體に於て、正しい方に向はせやうとした、それは、ロベスピエールや、マラーの腕では、出來ない、仕事であつた。

一　亂世の英雄

ロベスピエールも、マラーも、一體に、體格が弱かつたやうであるが、ひとり、ダントンは、强健であつた。彼れの身長は高かつた。四肢共に肥えて、力量は非凡だと

云はれた。其の顔色は、煤に染められたやうに黒くて、鼻が低く、眼が小さく、眉のみは、毛虫のやうに、太かつた。殊に、其の人並外れて、大きい口は、其の巨頭と共に、彼れの精神と辯舌との力を、優勢に示すやうであつた。彼れの談話は、極めて快活で、その聲は。洪鐘の鳴るやうに、よく響いた。

彼れの青年時代は、バリーて、辯護士をしてゐた。彼れは、ロベスピエールのやうに、最初から、議會に椅子を占めて居なかつた。彼れの出身は、ジヤコバン倶樂部であつた。彼れは、其處で、其の政治的天才を現はして、次第に、實際的に勢力を占めるやうに、なつたのである。

ダントンが、議場の一席を占めるやうになつたのは、三十二歳の頃からである。それ迄に、彼れの潛勢力は、可なりに根強く、バリー賤民の間に植え付けられてゐた、彼れは、早くから、政治家としての膽略を持つて、一方では、賤民を煽動てることに巧みな亂世の英雄らしい力を以てゐた。從つて、彼れは時代の要求と賤民の心理とを、能く直覺的に理解してゐた。時代が、次第に、革命熱に逆上するにつれて、ダントンのやうな人物は、自然に、其の頭を擡げ出すやうに、なつてゐた。

同じく、賤民を煽動することが上手であつても、マラーは、唯煽動する丈であつたその前途に對して、深い思慮が缺けてゐた。ロベスピエールも、群衆心理を囚へることには、妙を得てゐたけれども、しつかりした指導力を缺いてゐた。ひとり、ダントンは、賤民の心に喰ひ入つたのみならず、如何な場合にも、フランス人の生命を伸ばしてゆく考へを、忘れなかつた。彼れがジヤコバン倶樂部の第一人者となつたのも、その實力に相應した自然の飯趣であつた。

時代が亂れ始めると、第一に、平地に狂瀾を捲き起すのは、多數の賤民である。殊に、フランスの首都では、貧乏のどん底にゐて、貴族や、僧侶の豪奢な生活に對して、強い反感を持つてゐたものが多かつた。曾にそればかりではない。彼等はパンに饑え、砂糖の缺乏に苦んで、生き甲斐のある日を送ることが出來なかつた、斯うした

境遇にあるものは、多く、自棄してゐる。一度、政府の抑へが、ゆるみ出すと集を突衝かれた蜂のやうに、一齊に群り起るのが常である。ダントンは能く此の事情を知つてゐた。バリーに於ける多數の賤民の力を土臺として、革命事業を、手取早く進めやうと考へた。

ダントンは、專制の源であつた王を咀つた。貴族を罵り、僧侶を嘲つた。彼は賤民の身方として自由の前途を保證した。一度、ダントンの云ふところを聞くと、自然に、その破鐘のやうな大きい聲に動かされるよりも、其の適切な說法に動かされて、いつの間にか、ダントンの一味となつて了ふのである。

二　大暴動の巨魁

ダントンは、その革命事業を進行させるため、幾度、暴動を企てたか、わからなかつた。ミラボーが死んでからの暴動には、大抵、その背後に、ダントンが潛んでゐた。彼れは、此の點に於て、極めて非人道であつた。けれども、眞にその心の根迄も、非人道であつたか、如何か。それは、わからない。私は、何も、學究的に、ダントンを道德や、人道に反したものとして、責めないが、要するにダントンは、かういふ時代道德には拘泥しない人物であつたと云ふこと丈は、確かである。

それなら、彼れは冷血な人であつたらうか、その私情にのみ、囚はれてゐないところを見ると、割合に、事理には冷靜であつたらう。けれども、普通の人情は、慥かに、よく味はつて居たものと思ふ。必竟、彼れは、一方に於て、冷靜であるが、一方に於て、其の執心してゐる仕事になると、眞劍になり得る、火のやうな熱情があつたやうに思ふ。

彼れには、大きな政治的野心があつた。けれども、彼れは、野心そのものよりも、革命そのものゝ方へ、より多く動いた。彼れが、非人道な暴動を企てた事は、恐ら

く、彼れが、小さい人情を殺して、大きい人情に殉じやうとしたものとも見られないことは無い。少くとも、ダントンは、その敵を一掃して了ふため、革命の道に蔓る雑草を刈り取るため、多少の犠牲者を出すことについて、わざと眼をふさいでゐたものと思はれる。これは、私が詩人的な見方の上から、ダントンの心の中を覗いての同情である推察である。

七月のシャン・ド・マールスに於ける暴動、六月のツキルリー王宮に於ける暴動、八月のパリー街上に於ける暴動、九月の大虐殺など、何れも、皆主として、ダントンが同志を指揮し、企畫したものである。ロベスピエール、マラーの二人も、その罪を頒たねばならぬのは、云ふ迄もないが、主動者として、中心人物として、最もよく動いたのは、ダントンであつた。

ダントンは、目的のため、手段を選ばないで、猛進した。何でも、彼でも、遮二無二、進んだ。ジロンド黨の人々が、空言に、時を消費する間に、彼れは、ずん〳〵、其の手と足とを、動かして、共和政治の方へ、一刻も早く、近付かうと焦慮つた。それは何等の遲滯を許さなかつた。そのため、ダントンは、非常手段として、二度も、三度も、不快な暴動を起した。非人道的なことを重ねて、彼れの名に、暗い影を添へた。ダントンの強身も、弱身も、其處にあつた。

三　王黨の大檢擧

九月の大虐殺は、ダントンらの名と共に、記憶せらるべき恐しい革命の絶頂に達した物凄い惡夢であつた。其の光景は、名高い畫家が心をこめて、描いた地獄よりも、恐しく、物凄かつた。眞に、生きた地獄そのものであつた、革命の慘劇！、私は、つく〳〵大きな人類の不幸を、冷かに、見てゐるに堪えられない。假令、それが、遠く海を隔てたフランスで、餘程の昔に行はれたとしても——

嗚呼ダントンよ。

暴動を行ふ時の御身は、一種の惡魔に比しかつた。もう、其の眼は、革命のために、血走つて、殺氣が、眉の上に動いてゐたであらう。御身は、革命に渴するよりも、より多く血に渴いてゐたかも知れない。王黨の血と反對派の血に――

思ふに、ダントンは、斯うして、惡魔のやうに、思はれても、行くところ迄、落着がなければ、我慢が出來ない人であつた。當時のフランスは、內外二重の危機に臨んでゐた。外敵は、フランスの民主思想や、共和主義に極力、反對した。その後に、王黨の人々も、陰謀を續けてゐた。內部にあつては、未だジャコバンに對するジロンド黨の手强い反抗などもあつて、少しも、油斷が出來ない時であつた。ダントンは、內外二重の危機から脫して、一直線に、共和政へ急ぐため、非常手段を以てするより外に、全く道が無いと思ひつめたやうに見える。

その頃のパリーは、オーストリヤ軍に脅威されてゐた。人々はパリーに立籠つて。何處までも、手强く踏み留つて戰ふか、或は、一時、地方へ移つて、恢復の事を考へやうかと、思ひ惑つてゐた、その時、法相となつてゐたダントンは、議場に出て、その洪鐘のやうな聲を振りあげた。

『諸君、敵は、もう、ロンヰーを占領した。けれども、我等は、狼狽ては、ならぬ、フランスの中心は、パリーである。我等は何處迄も、中心點であるパリーを守らねば、ならない、我等は、あく迄、死守して、敵の肝膽を寒からしぬめば、ならない。』

ダントンの言葉の中にある『敵の肝膽を寒からしめる』と云ふ一句は、忽ち全國に傳へらるゝ警語となつた。人々は、始めて、パリー落ちを、思ひ留まつたのである。外敵に對する方法について、すべて、ダントンの指導に待つものが多くなつた。

ダントンは、それと共に內部にある敵(王黨)をこの大事變と共に一掃しなければ、畢に自分の與黨が不安であるのみならず、種々の困難が引續いて起るかも、知れない

と云ふ考へから、此にも、非常手段を執つた。マラー、ロベスピエールらは、それを助けた。内閣の人々も、公安委員會も亦、それに參加した。その非常手段は、武器を密藏してゐるものを探索すると云ふ名の下に行はれた王黨の大捕縛であつた。

八月二十九日(一七九二年)は、正に恐怖時代の序幕であつた。パリー市會は、嚴かな命令を發して、パリーの城門を閉ぢ、市民の逃亡を防いだ、而して、全市に亘つた王黨の大檢擧が行はれた。

四　議會に於ける獅子吼

パリーは、全く生命を失つて、久遠の眠りに入つたかのやうに、靜まりかへつた。市民は悉皆店を、閉ぢ、業務を中止して、家の中に、ぢつとしてゐた。彼等の顏には、何れも、不安の色が、動いてゐた。

町では、車馬の往來は、全く無かつた。唯羅卒が太鼓を叩いて歩く音のみが、異樣に聞えた。夜の十時頃、羅卒は、家々の戸を叩いて、王黨の嫌疑あるものを捜索して、そつと武器を密藏してゐるものをも探査した。羅卒のコト〳〵と歩く靴の音は、地獄から來る使者の足音のやうに、思はれて、人々は、その足音を聞くと、慄え上つた。

それ等の捜索によつて、二千組の武器が探し出された。王黨の嫌疑あるもの、三千餘人が、引張り出された。パリーの監獄は、滿員になつた。けれども、ダントンの目ざすところは、未だ〳〵左樣な物優しいことでは、なかつた、彼れは、根抵から、王黨の呼吸を留めて了はうと思つた。假令、それが暴虐であつたとしても、殘忍であつたとしても——

九月一日のパリーは、大なる緊張した光景に滿たされて、死の靜かさから、蘇生つたやうに見えた。市會は『敵軍近く迫つた』と掲示した。各役所の樓上には、黑色

の旗を翻して『國危し』と警告した。六萬の義勇兵は、それがため、急に召募された、警鐘は、諸方の寺々で高く、打鳴らされた、恐しく地響きさせる警砲の音は、絶え間なく、續けられた。バリー全體が、ひつくりかへるやうな騒ぎであつた。

斯うした空氣の中で、ダントンのみは、ひとり、落着き拂つてゐた。その日、議場へ入つて來たダントンの顏は、輝いてゐた。その一歩々々踏みゆく足音は、金剛力士のやうに、地響きを起すやうに、思はれた。全身すべてが力！左樣した趣が、見えてゐた。人々は、演壇に起つた彼れに、一齊に強い注意を與へた。此の國家重大の危機に、彼れが、何と云ふかと、心待ちに待つた。

『諸君、今、諸君の耳に入る警砲の音は、國家の危急を報せるのでは無くて、我フランス軍が、敵に向つて、突進する物音である。我軍が敵に打勝つには、唯雄往果斷あるのみだ。一にも雄往果斷、二にも雄往果斷だ。』

ダントンの豪快な言葉は、議場に、強い感激を與へた。人々は、ダントンと同じやうに元氣になつた。ダントンと同じやうに、勇往して、敵に當らうと云ふ心を起した。

それから、ダントンは、シャン・ド・マールスへも、至つて、義勇兵の前で、矢張、前と同じやうな演說をした。此でも、前と同じやうな感激を起させた。

五　虐殺された一萬人

九月二日夜、エルダンが、敵の手に落ちたと云ふ報告が來た、『國危し』の言葉は、何處へ至つても、口から口へ、耳から耳へ傳へられた。バリーの人々は、ダントンの言葉に勵まされたけれど、事實上の不安を流石に抑へることが、出來なかつた。

ダントンは、此の際、マラーらと協議して、王黨や、外敵へ內通した疑ひのあるものを、一氣に塵殺にしやうと決心した。死の魔神に比しい行爲は、此の時、實行に移されたのである。勿論、ダントンは、その表面に起たなかつた。彼れは、黑幕の人と

なつてゐた、マラーは、此の虐殺に與つた有力な指揮者だつた。

けれども、すべては、偶發した出來事のやうに、裝はれた。九月二日、バリー外廓の城門は、突然閉ぢられた。ダントン、マラー、ロベスピエールらの協議の下に、呼び集められた生命知らずの賤民は、市會の命令だと唱へて、武器を手にして、アベイの獄を襲ふた。而して、それを陷れた。此の牢獄こそは、ダントン派が、その虐殺を實行した本據となつた。其處では、空前の奇怪な裁判所が、開かれた。マイヤールと云ふ男が、主任判事となつて、その下に若干の自稱判事を置いて手取早く、引捕へて來た人々に、判決を與へた。それは、何の審議も、經なかつた。速決であつた。而も其の速決は、最も苛酷な速決であつた。大抵のものは、一二の問答が濟むか、濟まぬかに、死の宣告を與へられて、門外へ引出されると共に、四肢五體を寸裂された。

斯うして、虐殺されたものが、三日間に一萬人に達したのである。バリーは、一時悲みと、憤りと恐れとに燃え起ち、次ぎに、青ざめて、憂懼のどん底に陷ちたやうに見えた。眞にこれ末世の光景であつた。どんな物凄い地獄の繪も、これには、及ばなかつた。

其の中でも、最も哀れな犧牲となつたのは、ランバール公主であつた。公主は、アントワネットの女官長で、その深い愛顧を受けてゐた。唯それ等のことから、此の美しい人は、虐殺の血祭りにあげられた。

當時、相當に名ある人々の中に、此の虐殺の時に捕へられて、縱に逃れた時の記憶を記したものに『三十八時間の苦悶』『私の復活』などがある。それ等は、皆死の前に臨んだ人々の恐怖を、赤裸に描いてある。賤民らが、マラーなどの指揮で眞紅の血の大海に飛入つて、如何に、兇暴を極めたかを、鮮かに記してある。それ等の責任について、ダントン自身の頭上に、他日、恐しい死が、酬ゐらるべきは、當然であつた。

カーライルは、此の際、ダントンが、その私敵を殺さなかつたことを、賞讃してゐる。それでこそ、僅かに、ダントンの人物が、暴虐の中から、救はれてゐるのであ

る。それがなかつたならば、嗚呼それが、なかつたならば、彼れは魔王である。憎むべき魔王である。

六　戰ひの十字架

ダントンは、既に、大虐殺によつて、王黨の根を絶つた。少くも、其の半ばを絶つた。もう、内部に於て、王黨の有力なものは、居ないのである。其の次ぎに、彼れは、順序として、ジロンド黨を倒さねば、ならなかつた。ダントンは、最初、ジロンド黨と提携してゆく事に努めた。ところが、ルイ王の處分問題について、ジロンド黨は、成るべく、ルイ王の助命を求めやうとした。ダントンは、その助命に反對した。而して、此の問題は、結局、ダントンの勝利となつた。ダントンの勝利は、ジヤコバンの勝利である。こんなことから、ダントンがジロンド黨の人々に向つて、『諸君、平和、平和、互に和しやうてはないか。私等は、兄弟の一小團結で、革命のため、世界を敵としてゐる際てはないか。』と云つた言葉も、今は效力が無くなつて來た。

ジロンド黨は、一體に、紳士的、學者的、調和的の政黨であつた。けれども、ジヤコバン黨は、野人的、世俗的、非調和的であつた。從つて、ルイ王の處分が、濟むと、如何しても、自然、兩派の爭ひを惹起すやうに、なつてゐた。殊に、九月虐殺に於けるダントン、マラー、ロベスピエールの暗影は、ジロンド黨の最も憎惡した點であつた。

ジロンド黨は、ダントンを攻擊した。けれども、其の攻擊は、急所を外れてゐた爲め、ダントンは、苦もなく、それを、はねのけた。ダントンは、寧ろ、ジロンド黨の迂愚を笑つた。而してルイ王の死と共に、フランスには、大きな内亂が起つて外敵も亦多くなつて、内外の危機に瀕してゐるのを、如何しやうかと心配した。虐殺の魔王は、再び全フランスの勇氣の皷舞者として現はれて、議場に、其の獅子吼をあげた。

『諸君、我等は、此の内外危急の際に、内輪同志、互ゐに爭ふことを止めたいと思ふ。フランスをして、自由ならしめよ。今、フランスは、何よりも、賊軍を討滅することが、必要である。パリーは、即時、兵を募らねばならぬ。パリーの各區は、否、フランスの各區は、その幾千の勇士を提供するやうに、せねば、ならぬ。我等の中から、九十六人の委員を擧げ、二人宛、直ぐに四十八區の各區役所を訪うて、此の旨を告げたい。更らに又我等の中から、八十名を選んで、火の十字架を擧げて、全國の勇士を募るべく、全フランスを急行することにしたい。その八十名は、此の議會が、解散しない前、直ぐその行程に就くやうに望みたい。斯うして、努力したら、フランスは、天下の敵を壓倒して、眞に自由の目的を體現し得るにちがいない。』

ダントンの提議は、滿場の喝采の下に、速決せられた。斯うした場合に、タイタンの力は、偉大であつた。その雷聲を發するタイタンが居なければ、議場は、その指導を見出すに苦んだかも知れないのである。

七　田園に歸りて

ダントンは斯うして、其の外敵を一排しやうとしたが、同時に、其の内部に於て、到底、兩立し難いジロンド黨を打破らうと、決心した。それには、空論や、論辯を、無用とした。舌と舌と戰つてゐては、際限がないからである、ダントンは、彼れが、いつもの慣用手段である武力を背景とした。此の武力の前に、ジロンド黨は、苦もなく、脅かされ、打倒されて了つた。

ジロンド黨が、打倒れてから、ジャコバンの敵は、無くなつた。而も其の間でさへ、尙ほ平和が、保たれなかつた。今度は、同じ黨員の間に、疑ひ合ふ風が起つた。互ゐに險はしい眼付をし乍ら、表面は、何事も、なさ相に交つてゐた。

ジャコバンの精神であるダントンに對してさへ、疑ひの眼を向けるものが、黨内にあつた。いろ〳〵の讒誣が、ダントンについて、傳へられた。けれども、ダントンの豪快な性質は、そんなことに頓着しなかつた。唯此の暗い空氣は、ダントンに嫌惡の感じを起させた。恰度、暑中密閉した小さい暗室の中に、ぢつとしてゐるやうな心持に似たものがあつた。

ダントンは暫くその心機を轉換するため、その故郷へ歸つた。それは夏八月の頃であつた。滿目の綠葉は、血に濁つたパリーを見た眼に、快い新鮮な感じを與へた。オーブ河の水は、清く澄んで、無邪氣に流れてゐた。幼い頃の記憶が、自然に、ダントンの胸に蘇生つて來た。彼れは、パリーの空を望み乍ら、『嗚呼』と嘆息した。

『今後、天下は、如何定るだらう。』

ダントンは、それを考へると、前途に、尙ほ暗い影が、附き纏つてゐるのを、振り拂ひ難い樣に感じた。殊に、ロベスピエールとの關係を考へると、何となく、面白くないものがあつた。ダントンは、ロベスピエールの狹量なのを憫んだ、而してダントンに對して、一種の敵意を持つてゐるやうな風があるのを、遺憾に思つた。

八　敵の詐略

ダントンとロベスピエールの不和について、黨の人々は、皆心配してゐた。何とかして、二人の融和を計りたいと云ふので、友人らは、此の二人を會合させた。その時、ダントンは云つた。

『王黨を撲滅するは宜いが、我同志は、猥りに相擊つては不可ない。有罪と無罪とを混同するのは、贊成しかねる事である。』

ロベスピエールは、此の言葉に、反感を持つた。

『何と云はれる。誰が、一人の無罪者さへ殺されたと、君に告げたものがあらうか。』

これは、一種の挑戰であつた。ダントンとロベスピエールはもう、一日も、一刻も　兩立することが、出來ないのであつた。ロベスピエールが倒れて、ダントンひとり殘るか。ダントンが倒れて、ロベスピエールひとり殘るか。何れかに、決定されねばならなかつた。

ダントンを思ふものは、此の際、自ら演壇に起つて、其の所思を公衆に告げて、ロベスピエールを退治するの必要があるとを說いた。ダントンの朋友は、ロベスピエールらの罠に擺らぬやう、他に逃れることをも、勸めた。けれども、ダントンは、それを聞き入れずに、斯う云つた。

『自分の逃れる場所は、何處にもない。若し自由を得たフランスが、自分を追ひ出すならば、唯、他國に於て、牢獄のみが、自分を迎へるであらう。わが祖國は、靴の裏に迄付けて、持ち行かれ無いではないか。』

ダントンは、斯うして、ロベスピエールに對する計策を考へなかつた。自由の敵、共和の敵には、タイタンのやうに、恐しい手段を用ゐたダントンも、其の長い間、提携して來た同志に對しては、其の鋭い爪を磨がなかつた。

其の中、ダントンの同志が、一人捕縛された。間もなく、ダントンの一友人は、青くなつて、ダントンの家へ駈け付けて來た。

『貴君も、今夜（三月三十日）捕縛されるやうになつて居ますから、早く、御逃げなさい。』

ダントンの妻は、それを聞いて、慄え上つた。けれども、ダントンは少しも、驚かなかつた。如何な流言蜚語があるにもせよ、ダントンはダントンである。今迄、自由の道を正しく、歩んで來た第一人者である。ロベスピエールらの黨與が、如何に苦肉の策略を周らすとも、此のダントンを如何することも、出來ない。彼れは、斯う信じ切つてゐた。けれども、それは、大なる違算であつた。彼れは、矢張三月三十日の夜、公安委員の手に捕へられた。此の報は、翌日、非常に議會を驚かした。革命のた

め、一番、大きい功勞のあつたダントン、ジャコバン黨の根を、中央の政界に据えた巨人ダントンが捕へられたとすれば、恐らく、誰も捕へられないで濟むだらうか、人々は、不安の胸を抑へた。

九　飾らぬ天眞

ダントンの末路は、彼れが、當然、敵の上に行つた暴虐の酬ひとも、見られる。彼れが、法廷に於ける最期の雄辯は、彼れに、ふさわしいものであつた。それを傍聽したものは、ダントンの言葉に感動しないものは、なかつたほどである。けれども、ダントンの生命は、素より、それがために、救はれるべきものでなかつた。敵は、最初から、ダントンに死を宣告しやうとしてゐた。

斯うして、ダントンは、一大喬木が、倒れるやうに、此の世を去つた。彼れは自分の手で、道を切り開いて置き乍ら、今度は、其の切り開いた道を、又た自分の手で、塞いで了つた。ロベスピエールよりも、强力であつた彼れが、却て、ロベスピエールのため、打倒されたのは、もう、運命が、ダントンを見捨てたのである。

ダントンは、多くの罪を持つてゐた。その罪は、永久に消え去らない罪である。勿論、それは、彼れひとりの利己心から侵した罪では、なかつた。共和政へ、自由平等の生活へ急く爲めの手段として、演出せられた罪であつた。唯其の罪の内容が、革命時代の反映として、殘暴となり、暴虐となつた爲め、人々に宜い心持を與へないのである。それがため、彼れの人物、手腕は、正に、ミラボーと匹敵するに近いと云はれ乍ら、何となく、彼れに對しては、ミラボーに對する程の好感を持ち得ぬものが、多いのだ。

けれども、此の罪の一面を除くと、私が、最初にダントンの人物を批評したやうに、天眞を飾らない、豪快な巨人であつたことが思はれる。亂世に缺くことが出來な

い必要な人物だと思はれる。マラーとロベスピエールの二人を併せても、尙ほ其の上に出ることが出來ない程に、傑出してゐた人だと思はれる。殊に、フランスを敵の壓迫から、救つたについて、彼れの名は、感謝を以て、記憶せらるべき一面を持つてゐる。

何れにもせよ、私は、彼れの形式に拘泥しない點が、好きである。何でも、赤裸々にやつてのけるところが、好きである。男らしく雷聲を發して、人々を指導するところが好きである。彼れには暗い一面の外に、左樣した宜いところがあつた。彼れが臨終の時『ダントンは、女々しいことは嫌ひだ。』と云つた言葉こそ、能く、ダントンを現はしてゐる。

敗北者の最期

敗北者の最期

（ローラン夫妻）

暗い革命の嵐が吼える中に、美しく咲いた二つの花！唯左様、思ふだけでも、何となく、一種の懐かしい心持が私の胸に起つて來る。其の懐かしい一つの花は、マラーを刺殺したコルデーで、今一つの花は、ルイ王家の最期に、内務大臣となつたローラン夫人である。コルデーは、櫻の花のやうに、パッと咲いて、パッと散つた。ローランの夫人は、梅の花のやうに、霜の中から、香りを吐いて、寒天に、其の美しさを

見せて居たが、一夜、強い嵐に吹き散らされて、俄かに色ざめたやうな哀趣を見せてゐる。

ローランと其の夫人とは、能く揃ふた一對の夫婦であつた。ローランは、恰度、其の心に描いてゐたやうな妻を、その夫人の上に見出したと同じやうに、夫人も亦其の優しい胸の中に描いてゐた理想の良人を、ローランの上に、見出したのである。二人は、實に、深い戀仲であつた。夫人は、未だその少女時代に、ローランに逢つた時の事を、斯う記して居る。

『ローランは、禮儀正しく、愛嬌に富んで、其の風采は、優雅ではないが、質朴で落着いてゐて、何となく、思想家らしい樣子があつた。其の顏は、稍痩せて、日に燒けた爲め黑味を帶びてゐた。其の頭髮が、廣い、智力あり氣な額に、少しばかり蔽ひかゝつてゐる具合は、特に人の注意を惹ゐた。氏と話し始めると、其の表情は、次第に、快活になつて、自然作らぬ愛嬌が浮んだ。其の話す聲は、爽かて、話振は、要領を得てゐた。其の語の中には、思想上の暗示さへ含んでゐた。』

これで見ると、ローランの非凡な人物であつたことが、知られる。當時二十歲も年上の人に、深い戀を感じたのは、恐らく、ローランの人格に强く動かされたのであらう。斯うして、二人の交情は、次第に濃かになつた。ローランも亦彼の女の風采や、言葉の上に、非凡なところを見出したので、到頭、結婚して、新家庭を作ることに爲つた。それは、ローランが四十五歲、夫人が二十五歲の時であつた。二人は、暫く、愉快な生活を、バリーで送つてゐた。

一　理想の夫婦

其の後、ローランは、一家を擧げて、アミアンに移つたが、間もなく、リオンの製造業監督官となつて、リオンに近い場所へ家を移した。それから、數年の間、二人の

間に子供が出來たと云ふ外に、取り留めたこともなく、極めて平靜な生活を續けてゐた。けれども、時務に通じてゐたローランは、此の平和な生活の中にゐて、始終、フランス人の前途に非常な注意を拂つてゐた。ローランには、既に、商工業についての研究を發表した相當な著書があつた。彼れの識見と思想とは、次第に人々の間に知られて、リオン倶樂部の指導者の地位に起たせられるやうになつた。乃で、ローランは頻りに、其の周圍の人々に新しい革命思想を吹き込んだ。

ローラン夫妻は、時代の先覺者であつた。腐敗し切つたフランスを救ふには、自由平等を目的とする所の革命を實現させるより、外に適當な道が無いと固く信じてゐた。もう、フランスは、全く行詰つてゐた。彼等は、革命に點火するものが、思ひ切つて、早く出さへすれば、仕事は、一直線に進むのだと思つて、始終、バリーの空を眺めて時機の熟するのを待つてゐた。けれども、革命の進行は、その割合に捗々しく、行かなかつた。それが、彼等には、何より、もどかしかつた。

その後、バスチーユ破獄事件が起ると、愈よ革命の序幕が、開かれたと云ふ感じを、ローラン夫妻に與へた。けれども、熱烈なローラン夫妻には、それさへ、尙ほ、もどかしく、思はれた。

『左樣な手ぬるいことでは、革命事業は、敏活に進む見込がない。もつと正しく、堂々と歩みを取つて欲しい。』

二人は、斯う云ひ合つた。それからは、革命についての意義と必要とを記した小冊子を作つて、四方に配布した。彼等は、機會さへあれば、革命思想の普及に全力を傾けてゐた。左樣した事から、リオンに於けるローラン夫妻は、革命の皷吹者として、次第に、人々の間に、其の名を知られて來た。

或年の二月（一七九一年）ローランは、リオンの財政窮乏について、中央政府に向つて、扶助を請願する用務を帶びて、其の愛妻と共に、バリーへ出た。此の時は、凡そ七ヶ月ばかり、バリーに滯在してゐたので、種々の名士と交際した。ローラン夫妻

の宿へは、ジロンド黨の、ブリソー、ブゾー、ペチオンなどが、能く出かけた。ジャコバン黨のダントン、ロベスピエールも尋ねて來た。それ等の人々に對して、ローランの人物と識見とは、當然、快い印象を與へた。殊にローラン夫人の社交振は、彼等を惹付けた。其の聲は、美しい音樂のやうに響いた。談話の具合に、莊重な趣があつたので、それが、美しい人の唇から、洩れ出ると知り乍らも、何となく、偉大な人物の話を聞くやうな感じを與へた。勿論、夫人は、大抵、控へ目にしてゐたが、一度喋ると、其の話の中へ、相手の注意を集中させなければ、止まない魅力を持つてゐた。

從つて、ローラン夫人の名は、パリーに於ける革命派の志士の間に、一時に擴つて冬枯の野に於ける一輪の白薔薇のやうに、暗夜に於ける一點の金星のやうに、打仰がれるやうになつた。中には、夫人を氣高い女神のやうに崇拜したバーバルーのやうな美しい青年もあつた。彼れは、ジロンド黨の中で、最も勇氣のある男であつた。夫人も亦、バーバルーを愛して『アンチノスのやうな美しい人』と云つた。アンチノスはローマ帝ハドリヤンが、特に其の容姿を愛して、侍臣としたほどの美男子であつた。

斯うした事から、夫人とバーバルーとの間に、秘密の戀があつたと噂されたことさへあつた。けれども、此の位の事は、才媛の周圍に、よく立ち易い噂であつた。又た左樣した噂が立つたことは、如何に、ローラン夫人の名聲と人物とが、當時に喧傳されたかを思ふことが出來る。必竟、ローランの背後に、花やかな、しつかりした非凡の夫人が、ついてゐたと云ふことは、ローランの大きい强身となつたが、夫人も亦ローランのやうな志士の後についた居た所から、其の非凡の才能を見出された機會が多かつた。此の夫妻は、互ゐに、相倚り、相援けて、其處に、各自の個性を伸張させてゐた。

二　内務大臣の椅子

ローラン夫妻のパリー滞在は、二人に種々の感想を與へた。パリー政界の實狀は、能く知れた。革命を思ふ人々の中に、俊秀の多いことも知れた。ローラン夫妻は、ジロンド黨に偏せず、ジャコバンに付かず、暫く中立の地位にゐたが、何れかと云へばジロンド黨に親んだ夫妻の革命熱は、頂點に達してゐたので、隨分、過激な考へを以てゐた。夫人は、其の考へを、ブリソーの許へ、斯う書いて送つた。

『寛大な、わがブルータスよ。請ふ筆を捨てゝ、田園に去り、鋤鍬に親みなさい。現時の議會は、唯腐敗と壓制とに、滿されてゐます。此の腐敗と壓制とを、打破るために、干戈に訴へる必要もありませう。内亂は、誠に、恐しいことです。けれども、沈滯は、一層、恐しいことであります。生れて來ないかも、知れませんね。』

夫人が、ブリソーの許へ、此の書を送つてから、間もなく、ルイ十六世の逃亡事件が持ち上つた。夫人は、その事を聞いて、王が逃走し切れないで、途中から、パリーへ引歸したのを、殘念に、思つた。

『ルイ王が、パリーに居なくなれば、却て共和政治へ、早く進むことが、出來たであらう。』

夫人は、斯う考へた。此の點に於て、夫人は、夢みる人であつた。一種の理想家であつた。けれども、斯うして、遠くから、パリーの空を眺め乍ら、いろ〳〵の事を考へてゐる時代は夫人に取つて、最も多幸な時代であつたかも知れない。ローランとても、矢張、同樣であつたらう。何となれば、其處には、激しい黨爭もなく、辛辣な中傷もなく、醜い虚僞もなく、血腥い事件も、起らなかつたからである。

其の中、立法議會が、新たに成立した頃（一七九一年）リオンでは、製造所監督官制を廢める事になつたので、ローラン夫妻は、政治の中心たるパリーに向つて、新し

希望を抱き乍ら、出て來た。

バリーは、正に煮えくりかゑるやうな騷ぎの中にあつた。當時、ジャコバン黨よりも、勢力のあつたジロンド黨は、頻りに、政府に鞭ちつゝあつた。殊にプロシヤ、オーストリヤの二國は、何處迄も、フランスの革命思想を危險だとして、それを抑へ付け、進んで、內政に干涉しやうとする氣勢さへ示したのを見て、政府が、これに對し、弱い態度を執るのを非難してゐた。內閣無能の聲は、此處彼處に起つた。主戰說は、全フランスを動かして、いつても、外敵を追ひ拂はうとする意氣込みを示した、プロシヤにせよ、オーストリヤにせよ、反革命の國は、一氣に揉み潰さうとするやうな勢が、漲つてゐた。此の時、ジロンド黨は、議會に多數を制してゐたところから政界の重心は、自然、其の方に傾いて、その與黨の人々を集めて、新たに其の內閣を組織する事になると、ブリソーらは、ローランを、推薦して、內務大臣の要職に就かせた

三　ローランの失望

ローランが、如何な抱負を以て、此の地位に就いたかは、素より分明らない。彼れは正直な、老實な識見の人であつた代りに、變通の才と辛辣な手腕とには欠けてゐた。何れかと云へば、平和時代の內相として適當してゐたかも知れないが、混亂時代の內相としては、不適當であつた。けれども、フランスを愛し、バリーを愛し、その國家の前途を憂ひてゐた彼れは、一度、要路に起つて見て、其の胸にある經綸を、實地に具體化して見たいと云ふ熱心があつたので、進んで、內相の重位に就いた。

ローラン夫妻は、急に貸二階の一室から、豪奢を極めた巨大な官邸へ引き移つた。それは、前藏相カロンヌが、華美好きな性質の儘に作つた記念であつた。斯うした殿堂のやうに輝いた中に、生活するやうになつてからも、ローラン夫人の生活は、矢張リオン時代と少しも、變らなかつた。驕つた風は、微塵もなかつた　此の官邸で　ロ

ーランは、金曜日毎に、内閣の人々を招待して、清楚な饗宴を開いた。其の度毎に、夫人は、客を歡待ずることに、全力を盡した。而して毎週、人々が話した事を、一々記憶してゐて、後で、必ず、其の大體を記すことにした。

ローランの地位は、彼れが、最初、豫期したやうに、愉快なものでなかつた。議會は、混亂してゐた。同時に、政府も、グラ〳〵してゐた。出征中の軍隊が、冬に入つてからも、當時の陸相の不始末から、靴も、衣服も、供給されないと云ふ事を聞いて先づ胸を痛めた。或議員の云ふところに依ると、南部の防備軍中には、ズボンに缺乏してゐるものが、三萬人以上あると傳へられた。然し左樣した不始末は、陸軍省ばかりでは無かつた。内務省も、ローランが、這入る迄に可なりに、だらけ切つてゐた。

謹嚴なローランは、それ等のだらけ切つた有樣を成るべく、整へやうと思つて、機會がある毎に、續々警告書を發したが、中々、それ位の事で、政弊は、刷新され相にも、なかつた。政府の威信が、殆ど半減した時代で、あつたから、内相の威令も、直ぐに行はれなかつた。ローランは、その期待に裏切られて、漸く失望し始めた。

のみならず、ローランがブリソと提携して、ジロンド黨の一領袖となつてから、ジヤコバン一派はローラン夫妻に對して、中傷の言葉を放つた。夫人も亦それがため誣告されて、一度、議會へ呼び出されたことがあつた。けれども、それ等の誣告は、未だローラン夫妻の致命傷とはならなかつた。けれども、危險は、矢張、危險であつた。

險惡なパリー政界の空氣は、純潔な雪のやうに白い心を以てゐたローラン夫妻には適しなかつた。ジロンド黨の中には、可なりに、政界の事情に馴れた人々もあつたが、それさへ、ジヤコバン黨の權變と術策とには、敵しかねてゐた。況して、生れてから黨爭の味を知らなかつたローランは、先づ敵の中傷や、讒誣の極めて卑劣なことを、憤らずには、居られなかつた。リオンの平穩さに、比較て、パリー政界の餘りに、險惡なのに、深い嫌厭を感じた。

四　險惡な敵の毒手

其の中、ルイ王の問題が起つた。ローランは、政府の要路に立つてから、幾分か、ルイ王に同情を以てゐた。ところが、ローランは、錠前屋が、宮中の壁の中から、秘密の鐵筐を探り出して、ルイ王の秘密の手紙を、差出したのを、迂濶にも點檢しないで、其の儘、手巾に包んで、調査委員會へ送つた爲め、其の手紙が、ルイの隱謀を、明るみの中へ曝露して了つた。それは、ローランの一失であつた。

ローランは、ルイ王の處刑問題が起つた時、假令、共和政へ急ぐとしても、ルイ王の生命は如何しても、助けたいと考へてゐた。既に、王の頭上から、王冠を奪つた上は、その生命迄も、强ゐて追ひつめるに及ぶまいと思つてゐた。けれども、議會の大勢は、ジヤコバン黨の勝利となつて、到頭、ルイ王の最期を見た。弑虐の大罪を眼の前に見た。ローランは、それを我慢してゐることが、出來なかつた。

すべての光景は、ローランの考へとは、反對の方向へ、走つたものが多かつた。此の上は、政府に留まつてゐても、一層、曠職の名を得るのみである。彼れは、ルイ王崩御の後、間もなく、勇退しやうと、決心して、辭表を差出した。ローランは、內相の椅子を去ると、直ぐに、田舍へ引込んで、讀書生活に入らうかとも考へてゐた。彼れは、此の上、進んで、革命の大波が、逆捲く中へ、飛び込んで、其の優勝者とならうとは、夢にも、思はなかつた。彼れは、心から、淺間しい黨爭を厭つた。

けれども、政界の急潮は、一度重要な地位に迄起たせたローランを、その儘、田舍へ引込ませなかつた。殊に、ローラン夫人の政治家的才能は、ジロンド黨の花とされてゐた所から、野人ダントンなどは、ローラン夫人と政治的に提携して、行かうとさへ考へた。けれどもローラン夫人は、ダントンのやうな野性的な、田舍染みた始終、危險性を帶びた傾向を持つものに對して、共鳴することが、出來なかつた爲め、ダントンとは、根柢から、調和しなかつた。ダントン以外のジヤコバン黨の人々に對しても、矢

張、同様の傾向があつた。

その中、ジロンド黨とジャコバン黨の烈しい黨爭時代が來ると、危險の度が、一段深くなつた。ローラン夫妻の友人は『今パリーにゐるのは、危險だから、暫く他所へ御逃げなさい。』と切に勸めた、けれども、ローラン夫妻は、兩派の激爭、同志の奮鬪を傍觀してゐて、他に避難するのは、餘りに憶病だと思つて、矢張、パリーに留つてゐた。

五　鐵窓の下に呻吟するローラン夫人

其の中、運命は、先づジロンド黨全體に禍した。勿論、ジロンド黨は、ジャコバン黨に打破らるべき運命を最初から、荷つてゐた。ジロンド黨の人々は、その策戰が拙劣で、徒らに、昔のローマの英雄を氣取つたり、哲人を眞似たりして、高く標置するばかりで、其の手腕が、實際的に冴えてゐなかつた。喋ることや、學識に於ては、ジャコバンに勝つても、術策を以て、戰ふことになると、敵に一歩も、二歩も讓つた。そのため、ジャコバン黨から、最期の決心の下に、武力を以て戰ひを挑まれると、一溜りもなく、潰滅したのである。

潰滅後のジロンド黨は、見る影もなかつた。再擧を計らうとしたものも、あつたけれども、もう時代は、ジロンド黨を振返つても見なかつた。ジャコバンの追窮は、一層苛酷となつた。一時、飛ぶ鳥を落すばかりに、威勢のよかつたジロンド黨の諸名士は、其の身の置所にさへ苦んだ。ペチオンは、人目を忍んで、田舍に隱れたが、非命に倒れた。ブリソは、スヰスへ逃れやうとする途中、地方の革命委員に捕へられた。その他の諸名士は、續々、生命を奪はれた。

勝誇つたジャコバン黨は、更らに、其の鋭い眼を、ローラン夫妻の上に注いで居た。ロランは、逸早く危險を悟つて、先づその後を晦したが、ローラン夫人は、遲れて

到頭、敵の手に捕へられた。夫人は、サン・ペラジーの獄に入られた。

夫人は、素から、死を覺悟してゐた。けれども、夫人には、未だフランスのために良人と共に働きたいと思ふことが、澤山あつた。今迄、誠實に、革命に盡して來乍ら皮相な黨爭の犧牲となつて、無意味に此の儘、世を去るのは、堪え難い淋しい事のやうに、思はれてならなかつた。左樣なことを胸に浮べると、流石に氣丈な夫人も、暫く涙ぐまずには、居られなかつた。斯うして、夫人は誰も來ない時は、折々、薄暗い鐵窓の下で泣いた。

けれども、尋ねて來た人の前では、決して、泣かなかつた。涙一滴見せなかつた。平生の通りの顏色をしてゐた。その話振も亦家にゐる時のやうに、快活であつた。ローラン夫人は、此の獄舍生活の間を、無爲に送ることを、好まなかつた。夫人は、革命の最初から今日に至る迄の『見聞錄』に筆を執り始めた。それが、夫人に取つて、一番、大きな慰みであつた。又た極めて、有意義の仕事でもあつた。

夫人は、折々、其の良人の事をも、考へた。良人も亦自分と同じやうな運命になりはしないかと心痛した。左樣した場合には、ローラン夫人の頭腦も、流石に亂れ勝ちになつた。けれども、夫人は、いろ〳〵の悲みや、惱みに打克つて『見聞錄』の筆をずん〳〵進めた。

六　自由の假面

ローラン夫人が、禁錮されてから、五ヶ月目に、其の最期の日が、近付いた。十月の始め（一七九三年）夫人は、革命裁判所へ喚び出された。夫人は、白裝束で、長い黑髪を帶迄垂れて、出かけた。その時、判事は、僞證を擧げて、夫人を死刑に陷れやうとした。夫人は、それに對して、別に辯解しなかつた、唯正義は、最後の勝利であることを述べた。判事は、それに頓着なく、夫人に死刑の宣告を與へた。夫人は、

輕く首肯いたばかりであつた。而して、獄舍へ引かへすと、流石に暗涙に咽んで、深い悲みに、其の胸をとざされたやうに見えた、

夫人は、後に殘つた愛孃に、自分の考へを書き殘したいと思つて、一生懸命に筆を執つた。それは、長い教訓書で『後に殘つて、ローラン家の家名を恥かしめぬやう、自愛を望む』と云ふ意味が、記された。

夫人は、又たローランの事を考へた。今迄、ローランと夫人とは、始終、一緒に道を歩いて來たのである。それは、恰度影が形に伴ふやうな具合であつた。今若し自分が、死んだら、良人は、必度、生きてゐないであらう。自分は良人に先立つて、天國の道案内にならうと考へた。

もうこれて、夫人は、何の思ひ殘すこともなかつた。十一月九日、夫人は愈よ、刑場に引出された。刑場には、巨大な自由の像が立つてゐた。それが、夫人には、一つのアイロニーのやうになつて、其の美しい綠色の眼に映つた。これまで、一生懸命に自由のため、盡して來た自分が、却て自由に背叛した人々と同じ運命に陷れられやうとは、曾て夢にも、思はなかつたことでは、なかつたか。もう自由の叫びも、何等の價値が無くなつて了つた。夫人は、それを思うて、限り無い感慨に沈んだ。

やがて夫人が、斷頭臺の上に起つと、其の胸中の感想を記すため、刑吏に筆紙を求めたが、許されなかつた。夫人は、もう、あきらめて、自由の像を眺め乍ら、沈んだ聲で呟いた。

『嗚呼自由よ、汝の名の下に、如何に多くの罪惡が行はれたか。』

此の皮肉な警語が、夫人の唇を洩れると間もなく、巨斧は、夫人の生命を奪つて了つた。嗚呼自由の花は、冬の嵐に散つた、淋しく、悲しく散つた。

七　淋しいローランの終焉

ローランは、他日の事を思つて、唯ひとり身を隠したが、夫人のことが、氣になつてゐた。而して、夫人が捕へられたことを非常に心配してゐた。今迄、影となり、日向となつて、ローランの仕事を助けてくれた愛妻に別れて、ひとり、其の人生の道をゆくのは、堪え難い寂寥であつたにちがいない。

彼れの夫人が、殺された時、ローランは、ルーアンの友人の家に潜んでゐた。夫人の終焉の事が、非常に、ローランの心臓に、強い鼓動を與へたと見えて、其の顔色が眞青になつた。もう、彼れの前途には、何の望みも、光りも、なくなつた、それに、自分の愛妻のみを、先立てゝ、自分ひとり、此の不遇の世に生き殘つてゐることも亦大きな苦みだつた。ローランは、深く決心するところがあつて、その友の厚い情を感謝し乍ら、潜伏してゐた家を出た。

其の後、ローランが、如何したかと云ふことは、暫く分明らなかつた。ところが、その翌日（十六日）の朝ルーアンから、バリーへ通ふ街道の樹下に、一人の老翁が、端然と死んでゐた姿が、見出された。それは、自分で、仕込杖を以て、其の心臓を刺貫いたのである。其處には、一片の遺書が、置いてあつた。

『何人にもせよ、自分が死んだ姿を見出したなら、何卒自分の死骸を尊重して貰ひたい。これは。其の生涯を公共のために委ねた者の遺骸である。彼れは、生きてた時正直であつたやうに、死ぬ時も亦正直に死んだ。自分は、罪のない妻が虐殺されたと聞いて憤りに燃えて潜伏所を出た。それは、決して、恐怖のためではない、自分は、恐しい罪を以て、汚された此の地球上に、もう一刻も、長く留つて居やうとは、思はないのである。』

斯う記した老翁こそ、前内務大臣ローランであると知れた。ルイ王最期の名臣が、路傍で、はかなく此の世を去らうとは、眞に、人生の盛衰ほど、地を代へ易いものは無い。若し彼れが、平和な時代に於ける内相であつたら、其の生涯は、光榮を以て、飾られるべき筈だつた。唯彼れの性格に適しない環境の下に、内相となつた爲め、思

はぬ悲みに逢つたのである。而して、彼等夫妻が、革命のために、全心を傾けた酬ゐは、少しも、得られないで、却て、冷かな死を得たに過ぎなかつたことは、餘りに、淋しい運命で、なかつたか。私は、更らに、繰返して云ひたい。

『自由よ、汝の美名の下に、如何に多くの罪惡が行はれたか。』

時は急に過ぎゆく

時は急に過ぎゆく

（ラファイエット）

人生の半面は悲みの海である。凡人には、凡人の悲みがある。賢者には、賢者の悲みがある。王侯にも、美姫にも、貴紳にも、英雄にも、豫言者にも、皆それ〴〵の悲みがある。見やうによつては、すべての人は、此の悲みの海を游ぎゆく舟夫にすぎないとも見られる。唯其の悲みにも、有意義な悲み、無意義な悲み、高い悲み、淋しい悲みなど、いろ〳〵の悲みの差別があることは、云ふ迄もない。

フランス革命の黎明期が來たとを、先づ思想の上から、人々に告げ知らせたヂドロー、ルソーらの生涯は、寂寞と不遇との連續であつた。餘りに早く革命の曉を告げ知らせた爲め、何も知らない凡人の群は、此の二大先驅者を迫害した。そこに、先驅者としての高い悲みがあつた、けれども、其の悲みの中にも、彼等が自ら有するプライドがあつて、『自分は、凡俗の徒よりも、早く、目ざめたのだ。』と云ふ自意識の伴つてゐた事が、ヂドロー、ルソーらの身に取つて、一つの强味となつて居たにちがいなからう。

ところが、左樣した時代の先驅者として、荆棘の冠を與へられるのではなくて、寧ろ時代の逆行者として、新しい時潮から、次第に遠ざかりゆく者としての生涯に入るやうな場合は、高い悲みではなくて、淋しい悲みが、其の胸の奥に、湧き出づるであらう。『自分は、誠意を以て、環境に對してゐるが、時運は、自分より、早く彼方に向つて、歩み去つて了つた。』と意識した時の孤獨感は、大海の絶島に、唯ひとり、取り殘されたやうな感じがするであらう。フランス革命時代に於ける王黨の大立物として、一時、時局を支配する力があつたラファイエットの後半生は、何となく『時勢に遲れ人』『時代に取殘された人』と云ふ感じが强い。其處に、ラファイエットの淋しい悲みがあつたと思ふ。

けれども、ラファイエットの生涯に對して、誰でも、一種の愛着を感ずるのは、何故だらう。その人物が、高潔で、純白で、一本調子で、義氣に富み、同情に厚く、一旦、王黨として、起つてから、始終、ルイ王のために、心血を注いだところに、成敗を別にしての男らしさが、伴つてゐるからである。

一　革命初期の覺醒者

私が、少年時代に『米國史』を讀んだ時、ウオシントンの人格に共鳴したが、そ

れと共に、フランスから、出て、わざ〳〵アメリカの獨立軍を助けた貴公子ラファイエットのことを、敬慕した。彼れが、二十歳の時、アメリカ獨立の宣言書を讀んで、此の新興の若々しい國が、壓制のイギリスに向つて、花々しい戰ひを開いた意氣に感動した爲め、俄かに、新婚の妻を樂しい家庭に殘して置いて、自費で、軍艦一隻を買ひ入れて、それに乘つて、聲援のため、アメリカへ渡つたと云ふ一條は、私の少年時代の熱い血を湧き起たせたものである。

何と云ふ美しい心を持つた人か、何と云ふ仁俠肌の人かと思つて、私は、ラファイエットが、無暗に好きになつた。思ふに、ラファイエットには、人一倍、俠勇の念が、強く、彼れを支配してゐたのである。自分の利害そのものよりは、俠勇そのものに、全身を犧牲として捧げることを、彼れの本務だと考へた人である。一言すれば、彼れはフランスに於ける武士の典型とも云ふべき巨人であつた

ラファイエットは、當時の頑固な貴族社會では、最も進歩した自由主義を持つてゐた一人である。『自由』を蛇のやうに、惡魔のやうに思つて、容易に、それに、近付かうとしなかつた貴族のうちで、ひとり、早く、自由主義に共鳴してゐたのは、冬枯の庭に、赤い南天の花が、ひとり、日を受けて、色彩を添へてゐるやうであつた。從つて、彼れは、其の生涯の最初に當つて、決して、時勢から、遲れた人ではなくて、寧ろ時代の新潮と共に、進み行かうとする人であつた。

フランス革命の序幕が、開かれてから、ミラボーが死ぬ迄は、過激な極端な自由主義者は、未だ其の頭角を擡げることが、出來なかつた。ラファイエットの得意時代は、此の頃にあつた。彼れの抱いてゐた主義は、ジャコバン黨のやうに、過激な考へてはなく、寧ろ穩健なものであつた。立憲君主政の下に、ルイ王を擁護して進もうと云ふ考へであつた。彼れと同じやうな考へを持つた人々も、その頃、少くは、なかつた。

ラファイエットは、革命初期の自由覺醒者の一人として、フランス政界の事に、最も注意を拂つた、而して、ルイ王には、同情を以てゐたが、政府の財政紊亂について

は、容赦なく、攻撃の鉾尖を向けた、彼れは、貴族の群の中で、一番よく、人民に同情を寄せてゐた。現在の政治を改革して、君民同治の眞政治を布かなければ、フランスは、救はれないと見た一人であつた。

二　王と民衆の間に起ちて

フランス政府が、全く行詰つて、愈よ三族議會が、開かれた時、他の多くの貴族は、平民議員を侮つて、一緒に議事を進めやうとしなかつたが、此の場合に、ラファイエットのみは、左様した固陋な考へに、囚はれて居なかつた。

『時局重大の際、つまらぬ階級の差別を立てゝ、平民部と爭ふのは、舊思想の群にすぎない。貴族階級は胸襟を開いて、平民階級と握手しなければ、ならぬ。』

ラファイエットは、斯う信じてゐたのである。當時、新思潮に目ざめないのは、貴族のみでなかつた。僧侶も、舊形式の下に、惰眠を貪つてゐた。内閣の人々も亦、大切な時局に對する政策も、何も、持つて居なかつた。

ラファイエットは、それ等の現象を見て、心痛した。何か大きな不平の曝發があるまいか。彼れは、左様、考へて、フランスの行詰つた運命轉回の時期に、憂愁の色を浮べつゝあつた。果然、暴徒のバスチーユ獄を破壞した騷ぎが、持ち上つた。續いてパリー下層民のパン騷動が破裂した。それ等の事から、王權は、次第に動搖して、政權の重心は、半ば國民議會に移つた。而して、第二のパン騷動が起つた。

當時、暴徒は、ヱルサイユ宮迄、押し寄せて、ルイ王を驚かした。パリーは、上を下へと動搖した。此の時、パリー市民とルイ王との間に起つて、一方には、王の面目を保ち、一方には、市民に安心を與へるやうに、奔走したのは、ラファイエットであつた。彼れは、赤心を以て、此の責任を全うした。此の頃、彼れは、人々の尊敬を受けて、護國軍總督の重位に居た。

三　王に對する熱情

其の中、ルイ王が逃亡に失敗した時、ロベスピエールは眉をひそめて、廢說王を唱へたけれども、ラファイエットは、ルイ王を、左程、不快に見なかつた。王を非常に氣の毒に思つた。彼れは、寧ろ、萬民の上に位すべき王が、斯う迄、窮屈な目に逢つて、逃亡の中途から、バリーへ引返した淋しさを察して、忠實な、暖い心を以て、王を迎へた。彼れが、王黨としての熱情は、却て此の頃になつて、餘計に、深くなつた。

それに、彼れは、秩序と平和とを重んじて居たので、若し王を廢すると、一時に、內外の禍亂を挑撥する恐れがあるだらうと察した。折角、制定せられた憲法も何の功力さへなくなつて了ふてあらうと云ふ事を心配した。それには、矢張、立憲君主政を主張して、王を保護するのが、一番正しくて、適切な方法だと、固く信じてゐた。

ところが、今迄ラファイエットと提携して革命のために、努力して來たジャコバン黨の人々は、ラファイエットと、王の處分について、衝突した。彼等は、ラファイエットが抱いてゐたやうな同情を、王に對して、少しも、持つて居なかつた。又た彼等は立憲君主政を、生ぬるいものだと斥けて一躍して、共和への道へ急がうと熱狂した。而して、彼等の勢力は、次第に、ラファイエットの與黨を壓迫した。のみならず、彼等の領袖は、ラファイエットの說を曲解して『王黨に內通してゐるから、あんな生溫い事を云ふのだ。』と非難した。

ラファイエットは、一方に於て、確かに、王黨にちがいなかつた。けれども彼れは、宮中に於ける王黨のやうに、保守主義、武斷主義の傀儡では、なかつた。彼れは、もつと、進步的であつた。自由主義者であつた。彼れの行く道は、保守派と急進派との中間にあつた。高潔な彼れは、宮中にある固陋な人々とは、全く、別な世界にゐた。けれども、ジャコバン黨は、それを色眼鏡で見て、一概に、ラファイエットの軟化だ

として、罵り斥けた。

ラファイエットは、それ等の事を聞いて、寧ろ、ダントンらの心事を卑しいと思つた。殊に、パリーの治安と秩序とを破壞して迄も、突飛に、共和政へ急がうとするのは、大禍亂の原因である。パリーの秩序を重んずる地位にある自分としては、彼等の危險な遣り方に反對しなければ、ならぬ。もう、自分は、彼等と手を分つて、別の道を行くより外がないと、思ふやうになつた。

四　ジヤコバンの暴擧を憤る心

それから、間もなく、ラファイエットはジヤコバン黨と手を分つて、愈よ、別な道、彼れ獨自の道を歩き出した。而して、新たに開かれた立法議會で、少數乍らも、彼れは、其の同志と共に、右方に陣取つた。けれども、もう、王黨の氣勢は、前のやうに、力がなかつた。何となく、其の影が、薄かつた。唯ラファイエットの元氣が、いつも、衰へない丈であつた。

その中、フランスの革命主義が、歐洲諸强の保守主義と衝突して、オーストリヤ軍は、先づ、フランスに宣戰したので、ラファイエットは、外敵を防ぐために、五萬の兵を從へて、フメリープヂルから、ルーテルブルフの間を守ることになつた。彼れは、暫く、フランス政界の黨爭から離れて、遙かに、旅先から、其の樣子を傍觀しなければ、ならなかつた。彼れは、それを何より、物足らなく、思つた。

此の頃、議會の形勢は、次第に險惡になつて、ジヤコバン黨は、一段の暴威を示すやうになつたことが、ラファイエットの耳に入ると、彼れは憤りに燃えた。更らに、ダントンらが、賤民を煽動して、共和政への示威運動を議會の前で、やらせたと云ふことを聞いて、一段の怒りを增した。もう、彼れは、ぢつとして、それ等の光景を、遠くから、冷やかに、看過してゐることが、出來なく、なつて來た。彼れは、六月二

十日（一七九一年）暴民が王宮を騒がしたと聞いて、到頭、決心して、急に、その部下を從へて、バリーに歸つた。

此の事が、ジャコバン黨の耳に入ると、ダントン、ロベスピエールらは、一時猛獅が眼の前に、現はれたやうに、内心、恐怖した。ラファイエットが、バリーに於ける聲望は、相當に偉大なものがあつた。若し、彼れが、怒つて、武力を以て、活動を始めると、バリーの賤民らの力では、それを、如何することも、出來ないのである。運惡く、行けば、ジャコバンの自滅を招くかも、知れないと迄、思ひつめた。

けれども、それは、ダントンらの杞憂に過ぎなかつた。時勢の舞臺は、もう、全く一變してゐた、ラファイエットは、それを知らないで、自己を過信し乍ら、バリーへ來た。彼れが王を思ふ俠勇の心は、彼れを、バリーの中心へ搬び出したのである。

五　冷かな時代の潮勢

ラファイエットが、六月二十八日議會へ出て、獅子のやうに、大聲を發して、其の主張を述べた時は、元氣が、全身に滿ちてゐて、如何な反響を起すかと、思はれるばかりであつた。彼れは、數日前、暴徒が、王宮を騒がした事件を指摘して、其の背後に潜む煽動者を嚴罰に附するやう、主張した。

ところが、議會は、もう、ラファイエットの黨與に乏しくなつてゐた。ジャコバンの連中は、罵りの聲、怒りの聲で、ラファイエットの演說を妨げた。そのため、ラファイエットは、却て、餘計に憤怒したが、如何することも、出來なかつた。彼れは、荒い足音を立てゝ、議會を出た。

その時、ラファイエットは、兵力を以て、ジャコバン黨を一掃しやうと迄、思ひつめてゐた。彼れは、閲兵式の名の下に、彼れが、以前、支配した護國兵を集めて、ク

ーデターを斷行しやうとしたが、翌日、集つたものは百名ばかりに、過ぎなかつた。彼れは、失望して、一日延期した。而して、その日、更らに、集つた人々を見ると、三十名に過ぎなかつた。のみならず、彼れが、ルイ王のために、献策した事も、大抵、冷かに、遇せられた。すべてが、彼れの思ふ事と、反對の方向を執つた。

もう時勢は、大廻轉をしてゐたのである、ラファイエットのやうに、單純な俠勇のみでは、もう、仕事が、出來なくなつてゐた。彼れの立憲君主政の考へも、もう時代に飽かれてゐた。彼れは、それ等の事を、冷靜に考へないで、唯憂國の赤い心とルイ王を助けやうとする俠勇の一念とに驅られて、パリーへ來たが、それは、空しく、彼れの徒勞に歸した。

彼れが、失望して、その北境に於ける任地へ歸つた後で、彼れが恣まに、任地を去つて、パリーへ來たことについて、四方から、非難の聲が湧いた。中には、それを謀叛の行動だとしたものがあつた。パリーの愛國志士は、ラファイエットの肖像を焚刑に處した。その大きい聲望は、半ば消滅した。それ程迄に、苛遇され乍ら、彼れは、尙ほ王黨としての志を廢めなかつた。立憲君主政への道を開かうとしてゐた。

六　後へ取り殘された人

其の後、ラファイエットの仕事は、すべて時潮と逆行してゐたので、彼れが、種々の企劃も、大方、水の泡のやうに、消えた。彼れが、フランス革命との交渉を持つた生涯は、彼れが六月、パリーを去つた時から、消えた。それに、彼れの部下さへ、急激な民主思想を持つてゐて、もう彼れの意志の儘にならなかつた。

若しラファイエットが、時代の趨勢に適應して、君主政から共和政へ進むとしたら、彼れの前には、尙ほ多くの道が開けたのである。けれども、彼れは、その信念を變へなかつた。最後まで、王を見捨てやうと、しなかつた。假令、其の運命が、次第に、

悪い方へ向いても、彼れは、その俠勇の一念を押し貫くところに、彼れ自身の生命を認めた。又た假令立憲君主政が、新時代に逆行するものと云はれても、混亂と破壞の洪水の中へ飛び込んで迄も、共和政を高調しない方が、彼れの穩かな良心に背かないであらうことに滿足した。そこに、彼れの鮮かな個性が、現はれてゐた。

それにしても、時代に逆行して、次第に、王黨からも、過激黨からも、疎外されるやうになつた彼れを思ふと、何となく、淋しい悲みが、頻りに溢れて來るやうに、感じられる。私は、此の俠勇の模型で、古武士のやうなラファイエットを、限りなく、なつかしいものに、思つてゐる。

短劍を懷ろにして

短劍を懷ろにして

（コルデー）

フランス革命期のうちで、私等に、戰立すべき惡夢の感じを與へるのは、恐怖時代の光景である。重苦しい殺氣は、パリーを始め、全國に漲つて、斷頭機の響きは、日夜、人々を威嚇したことを思ふと、其處に、美しい人情もなく、可憐な涙もなく、幻の虹のやうなロマンスもなく、露にぬれた白菫のやうな詩もなく、唯暗い地獄の底から、人々の死を歌ふ恐ろしい聲が、するやうに、感ずるのみである。惡夢だ。慥

かに、それは、悪夢にちがいない。

左様した灰色の悪夢の中で、唯一つ、私等に、ダイヤモンドをはめた指輪のやうに、黎明に咲く赤い花のやうに、鮮新な詩の感じを與へるのは、彗星のやうに、革命の舞臺へ現はれて、又た彗星のやうに、彼の世へ消え去つたコルデーの短い生涯である。短くとも、意義ある彼の女の生活である。

美人コルデーが、マラーを刺したと云ふことは、如何に、當時のパリー市民を驚かし、ジロンド、ジャコバン兩黨を驚かし、地方の人々を驚かしたであらう。重苦しい空氣の中に浸つて、斷頭機の響きにも飽きはてゝ居たパリー市民は、此の出來事に逢つて、始めて、天の慈雨に沾れて、絶望のどん底から、救ひあげられたやうな心持をしたものが、可なりに、あつたらう。

若し時代の推移を、素早く看破る眼のあるものならば、此の出來事が、既に、恐怖時代の終結を告げる最初のベルの聲であつたと悟つたであらう。マラーが、コルデーによつて殺されたと云ふことは、やがて、ダントン・ロベスピエールが、不自然な最期を遂げると云ふ一つの惡兆を、ほのめかすものであつた。同時に、それは、ジャコバンの末路を暗示したものであつた。僅かに、一人の若い美人がした仕事が、革命の舞臺に、いろ〳〵の意義を持つてゐたのである。

一　マラーに對する憎み

ジャコバン黨が、フランスの政權を握つたのは、巨人ナポレオンが出る迄のつなぎに過ぎなかつた。或意味に於て、彼等は破壞の鐵槌を以て、革命の地ならしをしたのであつた。彼等が、愛の手を以て、人々を抱かないで、脅嚇の手を以て、人々を恐れさせて、幾萬の人命を犧牲にした應報は、案外に、早く酬はれるやうなことに、なつてゐた。

脅嚇によつて得た天下は、決して、長い間、保つことが出來ないのは、何處も、同じことである。全フランスの人々の中で、眞に、心から、ジャコバンの遣り口を謳歌したものは、幾人あつたらうか。パリーの賤民とても、もう、可なりに、人の血に飽き〳〵したにちがいない。而も、マラーらは、その血に飽くことを知らないやうに、尙ほ幾萬かの犧牲を、革命の祭壇に供へやうとした。マラーの眼には、世の呪詛も、憎怨も、全く、心にかゝらないやうに、見えてゐた。

マラーの斯うした態度は、其の反對黨を怒らせたばかりではなく、其のマラーに同情したものをさへ、多少、顰蹙せしめた形があつた。ロベスピールも、ダントンも、可なりに、憎まれたが、マラーが、一番、憎まれた、彼れは『王黨を二十六萬人殺しても、未だ足らない』と云ふやうなことを、平氣で、人々の前で公言した。何か云ふと必然、血腥い話をした。彼れは、それを以て、自己の特色のやうにして、そこに、一つのプライドがあるらしい風にさへ、人々の目に見えた。

それ等の事から、考へて見ても、マラーの運命が、一番、危殆であつた。マラーの生命を覗つてゐるものが、少くはなかつた。『其の生命を奪つて、マラーの血を啜り、肉を喰はねば。』とまで、憤つて居たものも、澤山あつた。美しいコルデーも、その一人であつた。

二　青年と美女の戀

コルデーがゐたカンの町は、ジロンド黨の勢力が、相當に強いところであつた。其處には、ジロンド黨の倶樂部があつた。バーバルーや、ルーゼーらは、そこで、頻りに、演說會を開いた。又た如何して、マラーのやうな狂暴者を倒さうかと云ふことについて策略を考へてゐた。彼等は、日夜、演說と策戰とに、忙はしかつた。

コルデーは、その頃二十五歳であつた。彼の女は革命を理解する迄に、可なりの敎

養を以てゐた。幼い時から、尼寺へ送られて、其處で、靜かに、勉强した後、叔母の家に寄食して、文學、哲學などに親んだ。彼の女は平生、プルタークの『英雄傳』を愛讀して、其の中にあるプルッスの人物に共鳴したと傳へられてゐる。プルッスは、シーザーを、自由のため、刺殺した理想家であつた。それ等から、考へると、コルデーの胸には、始終、自由主義を愛する精神が、動いてゐたのである。殊に、彼の女の親戚の家からは、有名な詩人コルネーユを出したと云ふ程で、一面、多感な傾向があつて、自由のためには、生命がけでも宜いと云ふやうな、熱烈なところがあつた。

フランス革命のプログラムが、進んで、次第に大詰に近付くと、ジャコバン黨の得意な時代が來た。コルデーは、元來、穩健な革命の希望者で、ジャコバン黨のやうに、多くの人命を殺傷して、恐しい惡魔主義の下に、革命の急激な歩みを執ることを好まなかつた。寧ろ、ジロンド黨の穩かな態度を敬愛した傾きがあつた。ところが、其のジロンド黨は、パリーの政戰に敗れて、カンの町へ、バーバルーなどが來て、旺んに、人々の義氣に訴へて、ジャコバン黨を排擊したのである、コルデーは深く、バーバルーに共鳴したと云はれてゐる。而して、コルデーが、バーバルーに共鳴したのは、其の秀麗な容貌と熱情とにあると云ふが、それは、果して、如何であらう、假りに、コルデーが、バーバルーに戀したとしたら、如何であらう、私は、それは、コルデーに取つて、不似合なことではないと思ふのである。

コルデーは、相當な美人であつた。栗色の髮は、白い頸の周圍に垂れかゝつて、生々した灰色の眼は、燃ゆるやうな熱情を湛えてゐた。唇は、きつと引締つて、梅の蕾のやうに見えた。斯うした美人を、バーバルーのやうな美男子に配して戀の一對とすることは、決して不當では、なかつた。

三　コルデーの決心

コルデーとバーバルーの戀の秘密については、充分、はつきりしない所がある。けれども、此の二人が、相當に、親密であつたことは、確かな事實であらう。コルデーは、此の戀しい人の旨を受けて、マラーを刺殺しやうとしたのであるか、それとも、自分の決意一つで、マラーに近付いたのであるか、その事も、はつきりしてゐない。今迄は、大抵、コルデーの自由意志に基づいて、マラー暗殺を決行したと云ふやうに、傳へられてゐる。

私は、コルデーが、最初からジャコバン黨に反感を持つてゐた所から、マラーの暴言や、殘忍なことを、度々聞いて、恐怖時代を齎した首魁として、殊に、マラーを憎んでゐたものだと思ひたい。而して、此の憎惡の念が、バーバルーなどに接近するにつれて、一層、高潮に達したのだと見たい。マラーを殺すと云ふことについては、それ等の憎惡の念が、最頂點まで上つて、もう、堪へられない。一日も、早く、マラーを除かないと、フランスの恐怖時代は容易に去らないのみならず、多くの罪のない人々の生命さへ、失はれると云ふことを、痛切に、感じて、バーバルーの誘發を待たないで、先づ自分から、マラー刺殺の決心をしてかゝつたものと見たい。

何れにもせよ、コルデーが、バリーへ行く時、バーバルーに逢つて、バリーの一名士の許へ、一通の紹介狀を書いて貰つたことは事實であつた。思ふに、此の時、バーバルーは、例のやうに、悲歌慷慨の態度で、マラーなどを攻擊して、一層、コルデーの公憤に燃ゆる心を刺戟したことは、事實であるやうに見える。

コルデーは、斯うして、僅かな手荷物を持つて、七月九日（一七九三年）その住んでゐたカンの町を出た。もう、此の時、コルデーの胸は、マラーを刺殺する決心で一杯になつて、自分は到底、生きて歸るとが、出來ないと覺悟して居た。彼の女は、父への遺言狀を、認めて置いて、其の先立つ不孝を詫びて置いた。而して、ガタ馬車にゆられ乍ら、十一日の午後三時頃、目ざすバリーへ着いた。

コルデーは、其の日、直ぐ宿屋へ着いて、午後から、翌朝迄、快い眠りを貪つた。

朝になつて、コルデーは、朝餐を濟ませてから、宿を出た。而してパーバルーの紹介狀を持つて、ジロンド黨に關係があつた一名士を訪ふた。其處で、直ぐに、用事を片付けたが、直ぐ元へ引かへさうとは、しなかつた。矢張、パリーに踏み留つてゐた。

四　疲れた敵の末路

コルデーは、先づ議會の有樣を實見した。ジャコバン黨の優勢な狀況をも、眼の前に見た。けれども、そこには、マラーの姿を見出さなかつた。マラーは、議會へ出て來て居ないことが、わかつた。

其の翌日、コルデーは、バレー・ロワヤールで、鞘入ナイフを買ひ求めた。而して、急に馬車を雇うて、醫學校町四十四番地へ急がせた。それは、マラーの家であつた。けれども、マラーは、病中のため、面會を斷つたので、コルデーの失望は、大きかつた。而して、すぐ〳〵宿へ引かへした。

コルデーは、到底、尋常の手段では、マラに逢へないことを知つた。乃で、彼の女は、すべての智慧を絞つて、マラーの許へ、一通の親展書を送つた。其の中には、斯う記してあつた。

『妾は謀叛の本場カンから來たものです。急に貴下に逢つて、密告したい一大事が御座います。而して、貴下に大きな手柄をして戴きたいのです。』

それでも、マラーは、疑つたと見えて、返事を與へなかつた。コルデーは、もどかしくなつて、再びマラーへ、手紙を送つて置いて、その夕刻、急いで、マラーの家を訪ふた。

その頃、マラーは、熱病に苦められてゐて、全身、骨ばかりに、痩せてゐた。コルデーが再びマラーを訪ふた頃は、湯に浸つたまゝ、呻吟いてゐた。もう、彼れの懷中には金が五十錢ばかりしかなかつた。粗末なテーブルが、マラーの唯一の友のやうに

見えた。流石、平生、豪語を吐いてゐた彼れも、餘程弱り込んで了つてゐた。

不圖、マラーの家の戸を叩く音がした。而して、美しい女の聲がした。その聲は、二度ばかり、手紙を寄越した女の聲であると、マラーは、直覺した。

『御這入り。』

マラーは、命令するやうに、嗄枯れた聲を出した。コルデーは、其の聲と共に、つと中へ這入つた。マラーは、コルデーの天女のやうな風采を見て、心から、安心して彼の女の胸の奥に、潜んでゐた計畫を看破るには、餘りに、病み疲れ切つてゐた。

五　一氣に心臓を

コルデーは、極めて平氣を裝うてゐた。而してマラーに相談したいことがある趣を告げた。マラーは、大分、打解けた樣子で、

『まあ、御かけなさい。今、國賊め等は、如何なことをして居ます。』

と尋ねた。コルデーは宜い加減に、それに答へて、主要な人々の名を云つた。すると、マラーの樣子は、急に、元氣を帶び始めて、

『フン、彼奴らの首は、もう半月足らずの中に刎ねて了ふんだ。』

と豪語して、傍らの牌を取り出した。

『バーバルー、ルーゼー、ペチオン。』

斯う人々の名を讀みあげ始めて、一々、それを書き出した途端、コルデーは、もう一刻も、許して置くことが、出來ないと思ひつめて、突然、ナイフの鞘を拂つて、充分、覗ひを定めて、一氣に、マラーの心臓を突き刺した。それは、見事に成功した。

マラーは、此の不意の痛手に驚いて、

『婆さん、早く來て呉れ。』

と最後の聲を殘した儘、バタリと倒れた。

隣室にゐた老婢が、急いで、駈け付けた時は、もう、マラーは、冷たくなつてゐた。魔王のやうに、敵から咀はれて居たマラーも、コルデーの一撃の下に、犬ころのやうに、はかなく、此の世を去つた。

マラーの死は、その近邊にゐた諸友を驚かした。彼等は、力を協せて、コルデーを捕へやうとした。彼の女は、それを恐れなかつた。椅子や、テーブルを、其の前へ積みかさねて、氣丈に抵抗した。けれども、憲兵が來ると、もう、溫和しく、するが儘にして、引立てられた。

コルデーが、マラーを刺殺した事件が、ぱつと世間へ傳へられると、其の噂は電光のやうに、人々の間に、ひろがつた。罵りの聲、感嘆の聲、非難の聲、賞讃の聲が、一時に、湧き返つた。すべての注意は、殆どコルデーの一身に注がれた。

六　最期の微笑

コルデーは、マラーさへ刺殺すれば、もう其の生命を失つても、滿足であると覺悟してゐた。アベイの獄へ入れられてからも、落着いて、平生のやうであつた。翌日、革命裁判所へ引き出されて、判事から、審問を受けた時も、美しく、晴々した顏をしてゐた。判事は『何人の教唆で、こんなことをしたか。』と尋ねると、コルデーは『何人にも、教唆されませぬ。』ときつぱり答へた。次ぎに、其の刺殺の動機を問ふと、コルデーは、俄かに、容を改めて、其の信念を告白した。

『妾は多くの罪のない人々を、虐殺の手から、救ひ出すため、マラーを殺したのです。フランスに平安を齎らしたい爲めに、彼の猛獸を一撃したのです。』

判事は、それを聞いて、冷笑した。

『唯一人のマラーを殺したとて、フランスは救はれるものぢやない。』

斯う嘲ると、コルデーは、微笑した。

『けれども、此の事を聞いたマラーのやうな人々は、必度、反省するにちがいありません。』

コルデーは、それを固く信じた。而して、愈よ死刑の宣告が與へられると、快く服罪した。コルデーは、滿足を以て、安心を以て、歡喜を以て、快く、黑い死に面しやうとした。

其の日の夕刻、コルデーは、馬車に乘つて刑場へ急いだ、途中多くの人々は、脫帽して、コルデーに敬意を示した。又た中には、コルデーを罵つたものもあつた。愈よ刑場に着くと、コルデーは微笑を含んで、少しも、死の事を、考へて居ないやうにさへ、見えた。而して、潔く斷頭臺へ上つた。

七　意義ある死

コルデーの死は無意義では、なかつた。此の悲壯な企てがあつてから、恐怖時代は、次第に、其の幕を閉ぢやうとしたのである。マラーの死は、やがて、ダントンの死を誘發した。ダントンの死は、やがて、ロベスピエールの死を誘發して、此に、恐怖時代の幕は下りた。此の恐怖の源だつた三巨魁の一角を、突きくづしたコルデーは、眞に、フランスの人々を、暗黑のどん底から、光明の地上へ、救ひあげる目的の一半を遂げ得たのであると云つて、差支えがない。

斯うして、彗星のやうに現はれ、彗星のやうに消えたコルデーは、永久に生きた。その美しい姿と美しい靈魂とは、いつ迄も、フランスの歷史から、消滅しないでゐる。

大正八年一月十八日印刷
大正八年一月廿五日發行

ふらんす革命夜話
定價壹圓六拾錢

著作者　高須梅溪
東京市麹町區飯田町一丁目二番地
發行者　株式會社天佑社
代表者　小林政治
東京市麹町區飯田町一丁目二番地
發行所　株式會社天佑社
電話番町(長)一七九番
振替口座東京一〇一二八番

東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　株式會社秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷者　佐久間衡治

■天佑社新刊書目■

田中王堂氏著

徹底個人主義

■再版出來■

四六判●箱入美本
定價金壹圓七十錢
送料金八錢

東京日々新聞の批評に曰く。『最近論壇の權威を以て推さるゝ王堂氏の論議、徹底個人主義以下九篇を集めて一卷とせるもの、何れも皆氏が最近の執筆に係り、各篇互に議論の對象を異にすと雖も歸する所は共に徹底せる個人主義、若くは個人主義の徹底を闡明せるに在り、獨立自足の論說として著者が試みたる此の「思想上の冒險」を聽て亦時代思潮の精華ならん云々』以て本書の價値を知るに足る。

佛蘭西大文豪グルモン氏原作 ■石川戲庵氏譯■藤島武二氏裝幀

再版 忽 小說 神人問答

四六判金箔押
箱入クロース美本
定價金壹圓三十錢
稅金八錢

東京朝日新聞本書を評して曰く。『グルモンの名作「リュクサンブウルの一夜」を飜譯せるもの曾てアポロン徒に某督と稱せられしと謂ふ神が今日の通常人の服裝にて現はれ一新聞記者と散步の途上廣く人生問題に關して問答すると云ふ作意にして配するに美しき三人の少女を以てす、小說にして同時に詩歌、哲學といふべく感情と理智との理想的に綜合せられたる傑作也。譯者は曾てルソーの懺悔錄を譯して世に知られたる人なれば譯文の流麗なるはいふまでもなし。』云々。

正宗白鳥氏著 ■正宗得三郎氏裝幀

烈日の下に

四六判箱入 クロース美本 定價金一圓五十錢 送料金八錢

現下小說壇の最高級に立てる大家として近來其筆致の愈渾熟し其觀照の益々透徹し來れるは白鳥氏也。人間の世紀末的苦惱と寂寥と倦怠とを描破して深刻。魂を嚙破るが如き自境に滲入せるはチエホフの再生とも云へく、文情の精鋭冷嚴にして而も詩味を含蓄せるはモワーパサンを髣髴せしむ、特異の個性と特異の藝術を表現せる氏の最近小說の傑作の精粹を輯めて敢て江湖にすゝむ。

中村吉藏氏著 ■岡本歸一氏裝 ■鮮臺面コロタイプ二葉

再版出來

戲曲集 白隱和尙 外四編

四六判箱入 クロース美本 定價金一圓六十錢 送料金八錢

本書に對する萬朝報の批評に曰く『世間』と『白隱和尙』は帝劇に上演されて好評を博せるもの脚本にて讀めば又別種の味あり、『肉店』『金力』『小山田庄左衛門』等何れも奇警にして著者が新社會劇に於ける創作の技倆が益々圓熟の域に達せるを見るべし云々。

■天佑社新刊書目■

田山花袋氏著 ■津田青楓氏裝幀

再版

最新紀行文集

湖のほとり

四六判極彩布表裝箱入頗美本 定價金壹圓卅五錢 送料金八錢 寫眞八葉挿入

田山花袋氏の紀行文大家として名聲嘖々たるは夙に江湖の知る處也。本書は氏が最近の紀行文を輯めたるものにして、淸新の情調と流麗の行文は眞に讀者をして恍惚たらしむ。氏の紀行文集多しと雖も本書の如く最新のものを集め、鏤心彫骨の名什を網羅したるものは他にあらず。希くは一本を購うて無限の興趣を掬したまはらん事を。

文學博士 大類伸氏著

新刊

現代世界の史的觀察

四六判 クロース美本 定價一圓八十錢 送料金八錢

（大戰終局に際し特に必讀を要する良書）

本書は史學界の泰斗大類博士が世界の發展を歷史的に回顧して現代の形勢を觀察したる論文說話を輯めたるものにして、所論多種多樣、帝國主義あり國家主義あり、バグダード鐵道あり平和問題あり、更に日米の關係を語り西伯利亞の歷史を說き興趣盡きず。本書を讀みて歐洲平和の情勢に着目せば感更に深く各國の折衝に一層の興を起すべし。卷末には興味深き世界現勢の繪入統計を添へあり一見して世界の大勢を知を得。苟くも現代有識の士たらんとせば是非本書を一讀せざるべからず。

谷崎潤一郎氏序文　◇再版出來◇

佐藤春夫氏著　同氏裝幀

病める薔薇

四六判箱入美本
定價金一圓六十錢
郵料金八錢

近時文壇の新人として一躍第一流の地位を占めたるものは佐藤春夫氏也。氏の作品は文壇の新らしき驚異也。巨匠谷崎潤一郎は氏を目して得易からざる天才なりと極賞し、生田長江氏は明治大正年間に渉り自然を取扱ひたる文學中余の知れる限に於て佐藤春夫氏の作品は最も正道を踏み最も高所に達したるものなりと激賞し、田山花袋氏は大正七年間中感心したる作品は佐藤氏の『田園の憂鬱』のみなりと嘆賞せり。熱情炎の如く、才藻花の如く、氣品高くして眞摯の氣全篇を貫く。悉く是無韻の詩と謂ふべし。本書は氏の新舊傑作の全部を網羅し一も剩す所無し。切に江湖の愛讀を要請す。

岡本綺堂氏新著　■小倉淳氏裝幀

再版

歷史小說

玉藻の前

四六判箱入美本
定價金一圓四十錢
送料內地八錢

古來日本の傳說中、最も面白くして興味多きは玉藻の前に關するローマンス也。妖艶無比、花の如き美人の周圍に起る數多の不可思議は吾人をして常に盡きざる興味を感ぜしむ。本書は文壇の大家として有名なる國本綺堂氏が絢爛の筆を以て新しく見たる玉藻の前を最も興味深く近代的に取扱ひたるものにして其不可思議なる美くしき彩色のローマンスは恰かも一大繪卷物を展開する如く、一とたび之を繙けば恐らく卷を釋つる能はざるべし。

米國大統領　ウイルソン氏著

日本　代議士前副參政官　岡和知氏譯

天覽賜

新自由主義（忽五版）（縮刷廉價）

菊半截美本
定價金壹圓
送料金八錢

今や世界第一の巨人として又現代平和の盟主として億兆の渴仰を受け人類興望の中心たる米國大統領ウイルソン氏が赤心を吐露せる稀世の名著は湧くが如き江湖の需求に促されて縮刷を刊行せり、其立論の雄大にして而も深遠を極めたる其主義の高邁にして直ちに眞理を示現せる、一面贖世の大碩學たる氏の活きたる政治哲學にして他面又此無二の大哲人が現代に漲れる新思潮の大勢を豫見し、社會問題、民本主義、民衆政治の基調を闡明して之を解決すべき最高標準を道破せる豫言的獅子吼也。添けなくも曩に天覽の榮を賜ふ、苟くも本書を味讀せざれば現代世界の大思潮を解する能はざるべし。

與謝野晶子著　□津田青楓畫伯裝幀

感想錄及び詩篇

心頭雜草

四六判布表裝美本
定價一圓四十錢
送料內地八錢

今や世界は戰後の激變期に入り、怖るべき大動搖の中に、新しい生活の健全な秩序を確立しようとして男も女も最善の努力を試みて居ります、我々日本婦人たる者、此世界の大勢の前に如何なる理想と實行とを以て順應すれば宜しいか、この焦眉の實際問題に就て、一般の女子、父兄教育者達に對し、特に私自身の覺悟を述べたるものは本書です。（著者）

外505

■天佑社新刊書目■

吉井勇氏新著

百人一首物語

■中澤弘光氏裝幀

四六判箱入美麗表裝
定價一圓三十錢
送料八錢

吉井勇氏艷麗雄渾の筆を揮ふて氏が造詣深き新き見所に立ち百人一首を解釋す、氏が斯道の新大家なる事は世既に定評あり。本書は從來の陳套なる解釋を捨てゝ新たに一生面を拓きたるものにして世の歌がるたを弄ぶは者は勿論一般歌學に志す者は是非一讀せざるべからず。

近刊豫告

英國文豪 オスカーワイルド著（一月下旬發行）
谷崎潤一郎氏譯

ウインターミヤ夫人の扇

四六判箱入美本
定價一圓二十錢
送料金八錢

英國文壇第一の鬼才オスカーワイルドの『ウインターミヤ夫人の扇』は其代表的傑作の一也。日本現文壇の鬼才谷崎潤一郎之を譯す、眞に東西鬼才の双璧也。谷崎氏の創作多しと雖も未だ譯譯の出でたる事なし、蓋し文壇の珍たるもの也。

3 ~~84~~ 235
~~24~~ TA54

終